JAPAN SOCIETY FOR INTERIOR STUDIES

JASIS NEWS

NO. 56

2016/2/29

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

大会に参加して

学会長　直井英雄（東京理科大学）

本年の大会も無事終了しました。金沢という都市の魅力もあって例年より参加者も増え、また、この大会で試みられた従来とは異なる行事スケジュールも問題なくこなされ、成功裏に幕を閉じることができました。大会長の長山先生、実行委員長の棒田先生はじめ、この大会を支えてくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

さて、毎年、大会に参加するといろいろな知的刺激を受けるのですが、今回の大会でも、いろいろと快い刺激を受けました。そのうちのひとつ、懐華楼のおかみの話を聞いているときに、ふと頭に浮かんだことをご披露したいと思います。それは、日本建築におけるインテリアをどうとらえたらよいか、ということについてです。私は、建築出身ですので、日ごろから、そんなことが気になっていたのです。

この問題について、日本建築にはインテリアがないという言い方をされることが、ままあります。それはさすがに短絡的な言い方だと思いますが、それでは、日本建築において、建築とインテリアの領域の関係をどのように考えればよいのでしょうか。

まず、どんな建物でも、そのなかで生活が営まれるわけですから、それを取り巻く物理的な環境としてのインテリアは、存在するといわざるを得ません。ただし、この場合、西欧の建築に比べて、建築の領域とインテリアの領域との物理的な重複が大きいというのが日本建築の特徴といえるでしょう。それと関係することなのですが、日本建築においては、両者の生産段階における仕事が分化していません。棟梁が職人を束ねてすべてを造ってしまうのが普通です。

それでも、寝殿造りにおいては、ほとんど躯体のままが建築の完成形でしたから、置き畳や几帳など、生活を成り立たせるために、インテリアの設えがかなり用いられていたようです。これが、書院造り以降になると、畳も敷き詰められて建築と一体化し、きわめてインテリア的な床・棚・書院や各部の造作なども、建築の一部として造られるようになります。

明治以降のわが国の住宅は、そういう伝統を引き継ぎながら、同時に西欧の建築技術も導入していきます。洋間や大壁なども登場し、住宅としては和洋ミックスの複雑な発展をしてきました。その流れの中で、インテリアの領域と仕事が建築から分化する例も増え、インテリアという概念も、わが国においてようやく定着することになったわけです。

以上、日本建築におけるインテリアの位置づけについて、私がふと思いついた粗雑なスケッチを披露いたしましたが、いかがでしょうか。どなたか、建築の立場からではなく、インテリアの立場から見た「日本建築におけるインテリアの歴史」をまとめていただけないものでしょうか。

■第27回日本インテリア学会大会 報告と概要

大会長　長山信一（富山大学）

日時：平成27年10月24日（土）、25日（日）
会場：金沢勤労者プラザ

北陸支部で開催する大会としては、第９回・第21回

に次いで第３回目である。今大会のテーマは、実行委員全員で検討し『伝統と創造の金沢探訪』と定めた。以下に、平成27年10月24日（土）～25日（日）に金沢市の“金沢勤労者プラザ”を中心に実施された“第27回日本インテリア学会金沢大会”の開催状況を報告する。

□大会１日目は“口頭発表”を行い、続いて“表彰式”が行われました。“名誉会員”として宇賀敏夫氏が表彰状を授与され、“第22回卒業作品展”では最優秀作品賞１点、優秀作品賞２点、奨励賞２点（高校生）と、学生による大会発表賞は広島工業大学の小原太樹氏が選定されました。引き続き、新機軸である研究に関する議論・情報交換の場として“研究交流懇親会”を開催。会場では議論を深め、美酒と心尽くしの料理を楽しんで頂きました。

□２日目は、朝一番に“理事会”を開催。一方、一般参加者は北陸新幹線開業に伴う金沢駅のリニューアルデザインを事前に見学した。“見学会”は、最初に数々の協会・団体の賞を受賞した“金沢海みらい図書館”を見学し、次に禅の世界観を演出していると評判の谷口吉生設計の“鈴木大拙館”を見学した。昼食は、伝統的な加賀料理とインテリアを楽しんだ。その後、バスで“金沢ひがし茶屋街”に移動し、散策を楽しみながら講演会場「懐華楼」に辿り着いた。

□「懐華楼」では、女将の馬場華幸氏による“金沢の茶屋文化・茶屋遊び”に関する講演を聴き、花街の文化・しきたりを学び、伝統的な茶屋建築のインテリアを探索した。閉会式では次回の開催地、東海支部の支部長河田克博先生にバトンを託した。その後、金沢駅西口に戻り解散した。

□今回の金沢大会では、合計70件（内パネル発表５件）の口頭発表があり、中でも学生発表の事例が23件と、今後のインテリアの裾野が広がることを期待させられました。さらに、卒業作品展への応募も盛んで、50校56作品の出展となった。学生など若手研究者の研究活動が活発化している事を実感した大会であった。

□最後に、大会に率先して参加下さった直井英雄会長を始めとする学会員各位、大会に協賛し支援頂いた地元石川県・金沢市の関係者各位、関連企業の皆様、大会を見事実現し遂行した実行委員各位および関係者各位に感謝する。

◆卒業作品展

卒業作品展には、50校56作品が出展された。

□作品の傾向としては、環境デザイン専攻の学生の出展が多かった故か、ランドスケープの提案作品が多くみられた。それぞれに素晴らしく完成された力作の中から最優秀作品１点、優秀作品２点、奨励賞２点を選ぶことにした。大枠として、ランドスケープ、インテリア空間、プロダクトの括りの中からそれぞれ１点、また高校生からの出展に未来への期待をこめて、奨励賞を２点選ぶことになった。

□最優秀賞作品は、金沢美術工芸大学・環境デザインコースの堀場絵吏氏の「Network-type Architecture’s」とした。金沢市中心街の古い街並を残す地域に対する環境デザイン提案であった。もともと備わっている街の潜在力を上手く引出し、現代生活に取込んでいるプラン力と、そこから発生するであろう文化発信をねらいとしてデザインされている点において、プランの拡がり感と実在の街を捉えた事による現実感や可能性が感じられる作品に仕上がっていた。プレゼンテーションボードは見やすいとは言えないが、個性があった。

□優秀作品においては、麻の葉をモチーフに和を取り込んだインテリア空間が美しかった文化学園大学・造形学部インテリアファブリックコースの中島有紗氏の「キゴコチ（和装の美を世界に発信する空間の提案）」とした。プレゼンテーションボードはタイトル通りの美しくわかりやすい仕上がりになっていた。もう１点の優秀作品は、東京藝術大学大学院　美術研究科デザイン専攻　空間・設計研究室の望月和也氏「家具を葺く」とした。神社の屋根の檜皮葺を連想させる木素材と技術を使いソファの座面とした、ユニークで発想原点のクオリティの高さとアレンジ力の強さが魅力的な作品だった。

□今回初めて審査に関わり、短時間に１つ１つの作品を把握する集中力と、いずれ劣らぬ秀作の中からそぎ落とす心痛。しかしながらも、見極めていく力を求められ、逆に審査する側の考え方や価値観、力量も問われているような気がした。

大変貴重な機会を与えていただき心より感謝申し上げます。　（新舛静香）

◆研究交流懇親会

懇親会は、本大会では研究交流を通じて様々な専門分野、知見をお持ちの皆様が連携を図り、より意義深い大会になるよう「研究交流懇親会」と銘打って金沢勤労者プラザ３階304、305研修室にて行いました。北陸新幹線開業により北陸に足を伸ばしやすくなった効果からか60名の参加の下、大会長の歓迎挨拶の後、直井英雄会長の

ご発声による乾杯で研究交流が行われました。地元の食材とお酒をご堪能頂きながら、参加者間で和やかながら活発な研究交流が行われ、研究発表会では語り尽くせなかった研究の詳細や想いを知ることができ、有意義な交流ができたのではないかと思います。また各委員会委員長や支部長からの活動報告もあり、北陸支部長の挨拶を最期に散会となりました。（森進太郎）

◆見学会

見学会には45名の方にご参加頂きました。朝10時に金沢駅西口観光バス駐車場を出発して、金沢海みらい図書館、鈴木大拙館を訪問し、金沢にしゃぶしゃぶを初めて広めた「料亭石亭」でお昼ご飯を頂きながら新たにつくり替えられたインテリアを拝見して、金沢市指定保存建物にも指定されているひがし茶屋街のお茶屋「懐華樓」を貸し切り、女将さんからお茶屋のしきたりや屋敷の特長についてお話しをして頂きました。

最初に訪れた金沢海みらい図書館は2011年５月に開館し、年間利用者が100万人を超える図書館です。約６千個の丸窓を埋め込んだ白色一色の外壁が特徴の建物で、シーラカンスK&Hが設計しました。国際インテリアデザイン協会「アジア太平洋デザイン・建築賞」最優秀賞や、BBC「世界の素晴らしい公立図書館４館（世界のスーパーライブラリー)」、日本建築学会作品選奨など数々の賞を受賞しています。

次の鈴木大拙館は「玄関棟」「展示棟」「思索空間棟」とこれらを結ぶ回廊からなり、回廊の両側には「水鏡の庭」「玄関の庭」が配されています。「水鏡の庭」は浅く水をたたえ、「思索空間棟」はその中に浮かぶように立っており、静かな空間を演出しています。

最後の懐華樓では、男性には禁断の芸者さんの支度部屋や、お忍びの裏口など、お茶屋さんならではの造りを見せて頂きました。（高橋未樹子）

◆昼食会と講演会

昼食会は金沢を代表する「料亭石亭」において、金沢の伝統料理を皆様に堪能して頂きました。一部館内の建築、美術品等を見学頂いた。石亭は浅田屋1867年（慶応３年）に旅館業が、1964年北陸で初めてしゃぶしゃぶで飲食業を開業して、現在に至る、金沢に於いては伝統を守りながら先進的な展開を進める数少ない料亭である。

講演会は見学会の会場でもある、東山茶屋街では一番大きい懐華楼の女将馬場華幸氏に、お話しして頂きました。馬場女将はスチワーデスからお茶屋の女将にという、作法の厳しいお茶屋の世界に入ったという異色の女将です。お話を聞く前に御抹茶とオリジナルの和菓子を頂き一息つき、お座敷に上がり講演に入りました。

お話の内容は「金沢ひがし茶屋の茶屋文化と遊び」について、お茶屋でのしきたり、遊びの礼儀、懐華楼のお部屋の説明、使い方、現在もお茶屋さんは一見さんは入れず、しっかりした紹介者が必要で紹介した人の責任の重さ等、花街でのなかなか聞けないお話を聞くことができました。また、外観は２階建だが室内は４階建という面白い構造で秘密の部屋があり、そこでは誰にも会わずに遊べ裏階段の出口から帰る事ができるという裏話も聞け、今後もし機会があればぜひ使ってみたいと思ったのは私一人ではないのでは？

参加者の皆様も普段味わえない茶屋街のお座敷でお酒、お料理、芸者さんこそありませんでしたが、雰囲気だけは十分味わえたと思います。

参加者の皆様に金沢の花街をご堪能いただき、講演会を終了いたしました。

ありがとうございました。

当日は馬場女将のご厚意でお忙しい日曜日にも関わらず貸切にして頂き感謝申し上げます。（斎藤重美）

◆結びに

今大会は例年とは異なり、第１日目に大会、表彰式、研究交流懇親会としました。会員の皆様にはホテルの確保や料金の高騰、新幹線の予約、午後からの開催と戸惑わせる大会となったかと存じます。が、このような状況の中でも120名の参加をいただけたこと、心より感謝申し上げます。

また、２日目の見学会、講演会は申込みの出足が遅く心配していましたが、終わってみればこれまでの金沢大会よりも多くの参加をいただくことができました。アンケートでは「発表が先にあったので、気楽にオプションを楽しめました」とか、直々に「よい大会でした」などと、温たたかいお声を多くかけていただき、これも感謝、感謝の思いでございます。ありがとうございました。

なお、見学会参加者の方々と鈴木大拙館にて記念撮影をしました写真は学会ホームページよりダウンロードできるようお願いし、お渡ししてあります。ご確認ください。

□最後に、この大会の実行委員の方々を紹介して報告を終わります。

大会長　長山信一
大会実行委員長　棒田邦夫
大会実行委員（受付・見学会）　高橋未樹子
大会実行委員（座長・見学会）　河内久美子
大会実行委員（座長）　佐伯高基
大会実行委員（卒業作品審査員・見学会）　新舛静香
大会実行委員（研究交流懇親会）　森進太郎
大会実行委員（昼食会・懐華樓）　斎藤重美
大会実行委員　金沢学院大学美術文化学部学生

（棒田邦夫）

見学会　海みらい館

料亭・席亭

記念講演会

見学会　鈴木大拙館

■学会大会・研究発表講評

発表一覧

【住　　宅】

　　００１～００５　座長　長山洋子

【インテリアと生活】

Ⅰ　００６～０１０　座長　片山勢津子

Ⅱ　０１１～０１５　座長　松本吉彦

【計　　画】

Ⅰ　０１６～０２０　座長　江川香奈

Ⅱ　０２１～０２５　座長　平田圭子

Ⅲ　０２６～０３０　座長　渡辺秀俊

Ⅳ　０３１～０３５　座長　渡邊朗子

Ⅴ　０３６～０４０　座長　河内久美子

【病院・学校】

　　０４１～０４５　座長　森永智年

【家具・人間工学】

Ⅰ　０４６～０５０　座長　高橋未樹子

Ⅱ　０５１～０５５　座長　藤原成暁

【感性・教育】

　　０５６～０６０　座長　布田　健

【歴　　史】

　　０６１～０６５　座長　高橋敏郎

【パネル部門】

　　０６６～０７０　座長　佐伯高基

【住　　宅】

　　００１～００５　　座長　長山洋子

001、002は二世帯住宅に関する共同研究である。

001　（松本他）は二世帯水廻りの使われ方を考察し、息子夫婦同居では水廻りを世帯ごとに設置する事例が多く、娘夫婦同居では１つが多いことを示した。水廻り２つの場合、シェアする使われ方は娘夫婦同居に特徴的に見られ、キッチンのシェアは食事の持ち寄りなど多様な使われ方があり、協力関係が強く、同居満足度が高いとした。洗濯機のシェアは世帯間協力に加え２台同時使用の効率化があげられ、浴室は親が孫を入浴させると２つシェアになりやすく、生活時間のずれや集中への対応などのメリットが生ずるとした。二世帯同居の暮らし方を「水廻りの使い方」という視点で探り「シェア」という協力関係の実態を示した点が興味深い。

002　（下川他）は息子夫婦同居と娘夫婦同居の交流意識を探り空間の使われ方の特徴を分析した。嫁姑、娘母の交流レベルと気兼ねレベルを軸に類型化し、息子夫婦同居は同居の母に言いたいことを言わないが、両世帯の盛んな交流を希望する「交流上手型」が約半数を占めるな

ど、両世帯の頻繁な交流があり交流意識レベルが高い方向に多様化していることを示した。娘夫婦同居は同居の母に言いたい事を言い二人の交流もあるがキッチンは２つ欲しい「自立シェア型」が約半数を占め、建物分離度を高めて自立を保ちながら密な交流があることを示した。交流意識の軸を交流レベルと気兼ねレベルで分析し空間の使われ方を示した点は興味深い。さらに、回答者が子世帯の妻であることで結果に偏りが生じないか、介護に関する意識および男性側の意識も知りたいなどの意見があがった。二世帯住宅の暮らしに深く入り込んだ研究の更なる結果に期待する。

003、004は可変仕切りに関する共同研究である。

003 （熊谷他）は、可変間仕切りの歴史的変遷を整理した上で可変間仕切りの種類を整理し、集合住宅供給デベロッパーに可変間仕切りのニーズをヒアリング調査した。その結果リビングとダイニング、LDと隣接空間、個室などに使われていることを確認し、さらに簡単に可変できない、着脱が難しい、環境対応商品が少ない、バリエーションが少ない、住まい手が簡単に使える商品が欲しい、など意見・問題点が指摘されたことを報告した。今後、美しい内装部材の調和をベースに、日本らしさの見直し、軽量化、素材の環境対応、カスタマイズ性、素材機能の豊富なバリエーションに重点を置き開発するとした。

004 （橘田他）は、可変仕切りの現状と問題点を踏まえて、住宅における時間や家族の変化に自由に対応し、空間の調和を考えた可変間仕切りシステムの開発を目的とし、エコロジカルな素材と利便性、空間や季節の楽しみ方に焦点を当て開発したことを報告した。これらをモデル空間に展示し評価アンケートを行った結果、問題点として開閉時の音や安定性、防音性や防湿性といった性能面、コストや販売方法などをあげたが、空間に自由に対応し調和させることで住宅の質的向上が図れるとした。さらに、日本的美しさとは何か、可変式とはどのようなシステムか、寸法はどのように考えているのか等が指摘された。今後これらの課題解決に向けた開発に期待する。

005 （久芳他）は、狭い空間では身体的・心理的に豊かに感じられる空間づくりが必要であるとして、空間の抜けに着目し、空間の抜けを定義、物理的要因、空間の抜けが人に与える可能性のある要素を整理した上で「住宅特集」から専用住宅約160事例を調査対象とし分類考察した。１つの空間の抜けに対して複数の空間の要素がある事が結果として得られたとし、空間の抜けの形によって、空間の要素が異なる空間の抜けに空間の要素をより強めるなどの影響を及ぼす可能性がある事が得られたとした。狭い空間における「空間の抜け」に着目し、空間の抜けを物理的要因、人に与える可能性要素に分類し考察した点は興味深い。本研究は雑誌掲載写真からだけの分析だったが、今後は実空間など調査対象を工夫して進めることを期待する。

【インテリアと生活Ⅰ】

Ⅰ　００６～０１０　　座長　片山勢津子

006 「生活のこだわりテーマ」に関するアンケート調査（2014年10月実施、n＝2298）の結果報告で、2008年の結果と比較していて興味深い。全体的な傾向としては、より一人で行うテーマへ、また、上位テーマで男女差が少なくなると分析している。「こだわり」についてどのように被験者は答えるのかというフロアーからの質問に対しては、主観に任せているとの回答で、実態を把握しにくい面が残る。

007 006の続編で、こだわりテーマを実施することで満たそうとしている欲求について因子分析を行い考察している。また、「趣味を楽しめる住まいづくり意向」の高いテーマについては、その属性や実施内容をもとに、空間要件への考察を類型的に進めている。今後、より実態が把握できるような踏み込んだ調査を期待したい。

008 住まいの掃除に関する実態調査の結果報告である。LDについては週１回、５-10分、掃除機使用が最も多いが、頻度が高いほど時間は短くなる。また、カーペットや畳敷きの部屋の掃除時間は長いが、高齢世帯に多いことが関係すると分析している。掃除しづらい場所は窓サッシ、部屋の隅の床、網戸、家具の下で、未就学児のいる家庭では、食べカスをあげている。どのような住まいの提案に繋げていくのか、興味のあるところである。

009 008の続編で、女性を対象に掃除スタイルのクラスター分析を行っている。実態や不満点から、内装提案はクラスター別にすることが有効であると結論づけている。ただし、内装は掃除しやすさだけで考えられるものではないので、アンケート調査に内装に関する別の視点も必要ではないかと思われる。今後の提案に期待したい。

010 統計データを用いた住空間における家財占有率に関しての報告である。住宅規模の動向を住宅・土地統計調査に基づいて行い、家財所有状況と占有率について全国消費実態調査（主要耐久消費財）と建築設計資料集成を下に分析を行っている。平成６年以降、住宅の床面積及び家財の占有率は減少傾向にあると結論づけている。大変な作業だったと思うが、研究目的が明確でなかったのが残念である。

【インテリアと生活Ⅱ】

Ⅱ　０１１～０１５　　座長　松本吉彦

011は、絵本によって住まいの文化を次世代に伝えることを想定し、知る、楽しむ、役立てるといった目的を６分類、自然との関係、人や集団との関係、材料や装備など住文化の内容を５分類し、掛け合わせた表上で実際の

絵本を分析している。人・集団とのつきあい方に関する絵本が多様な目的で存在し、自然環境への対応では、すだれなど伝統的な暮らしの知恵を伝えるものが多く見られるのに対し、材料や装備に関するものは畳やトイレの歴史に関するものが少数あるのみで、空白の分野が多いことがわかる。絵本で目的別に表現される住文化の内容がよく整理され、そのベースとなる和室を住宅に設ける意味についても考えさせられる発表であった。

012は、現代インテリア、という言葉で認識されている年代の範囲や、そのとらえ方を学生へのアンケートによって明らかにしようとしたものである。概ね1980年代後半以降からが現代とされた中で、その年代の違いは、環境共生や感性、素材といった社会的なテーマの認識に影響されていることが示唆された。現代インテリア100選の選定を目標として「現代性」とは何かを探求する一連の研究であるが、本アンケートの結果だけではその全体像が理解されにくく、研究の目的や意味についての質問が会場からあった。本稿を理解するためには2009年の第21回大会から始まる一連の前報も合わせてお読みになる事をお勧めする。

013は、住宅インテリアを50代以上の建築家がどう捉えているかを、インタビュー調査したものである。建築とインテリアを一体と捉え空間を創る傾向が強く、造作や素材への関与も多く見られる反面、窓廻りへのこだわりにはばらつきがあり、季節の設えや装飾的なカーテン等ライフサイクルの短いものには関心が低い傾向があるように見えた。そうしたインテリア要素に対する施主の志向が低いことが、建築家側の意識に反映している部分もありそうである。これも各世代の建築家に対する一連の研究の続報としての性格が強く、参考文献に示された前報と合わせて読むべきであろう。

014：発表者欠席

015：日本の生活様式の特徴を、フランスで国際結婚した日本人女性の家庭への訪問調査から描き出す研究である。日本的習慣が外国人の配偶者にどう取り入れられ、拒絶されるのかがリアルに示され、ユニークな研究手法ながら本質に迫るものと感じられる。靴を脱ぐ習慣、親子就寝の期間の長さ、LDの子供のモノの多さなどが日本的習慣とされている。中でも幼児期の母子同寝への抵抗が強く、医師から注意を受けたり、夫婦別寝として父子就寝で対応したり、布団を床に敷くのを来客に見られないよう工夫したりする例が報告された。子供を幼児期から子供室に１人で寝かせる欧米の習慣と、日本の現状や考え方とのギャップを大きく感じさせる研究であった。

【計画Ⅰ】

Ⅰ　０１６～０２０　　座長　江川香奈

016はまず施設を「若年・軽度」から「高齢・重度」に分類整理し、その代表例について運営状況及び建物の使われ方、併設している機能、高度医療への対応方法をまとめており、研究全体の構成軸が明瞭である。興味深い内容としては、使われ方に関して「若年・軽度」では、平面形にある奥まったスペースを生かした使用方法などを明確にしていることが挙げられる。今後、調査事例数を増やすことで、各分類においてこのような使用方法を明確にすることでより詳細な機能確保のあり方に関する知識の蓄積となると思われる。

017では看取り時の詳細な空間利用方法について明らかにしている。２事例のみの結果であるため、看取りの方針と平面構成の関連が深かったとは言い切れない面がある。例えば設計時に取り入れた運営方針を明らかにするなど、ヒアリング内容を追加することも検討が必要であると考えられる。尚、看取り時に行われる室内の家具配置の変化について、詳細にまとめている点は今後の居室の形状や面積に関連する貴重な資料となると考える。

018では複数の食事空間を設けている事例や生活場面に応じた椅子を使用している事例を分かりやすくまとめており、置いてある家具から生活の楽しさが伺える事例が多く見られた。日本では部屋数が少ないことや各室の面積も異なることから、今回の結果をそのまま取り入れることは困難であることは予測できるが、面積当たりの椅子数や、椅子使用時の状況など日本と比較し、その差を捉えることで、的確な対応策を提示できる可能性があると思われる。

019では伝統住宅の建物の配置状況や平面形等について複数事例を横断的にまとめている。貴重な資料を積極的に活用しており、結果として配置状況からは気候が考慮されていることが伺えた。配置以外の環境への配慮点を明らかにすることで、現在の住宅設計に活かせるアイデアの提示につながると考えられる。

020は、グリーンランドの雪を用いた住居を、素材と構法を変更し再現したプロセスと素材変更時の利点について明らかにしている。プロジェクトの内容とその過程が斬新であり、また過程で生じた問題点の解決方法を的確に提示している点が評価できる。発表会時の議論にもあったように、仮設住宅への応用などを視野に入れた研究も期待される。

【計画Ⅱ】

Ⅱ　０２１～０２５　　座長　平田圭子

021 「建築プログラム」概念の体系化と相互関係の研究と題して、今回は予備的考察として述べられた。建築空間の根源的プログラムは『スペーシングと室内環境調整』という２つのことがセットで起点となったとして考え、プログラムの連鎖を【建築プログラムの系統樹】にて今後具体的に示される予定である。質疑応答では、

「プログラム」の定義や、事例研究対象とする建築の範囲についてなど質問があった。興味のある研究内容である。今後の進展を楽しみにしていたい。

022　住宅産業の変遷のなかでインテリアがどのように変遷・発達し、住生活にどのような影響を及ぼしてきたのかを統計を基に時代分類し、変遷内容を体系的に示した意義のある研究である。着工戸数の変化により４期に分類し住宅産業とインテリアの時代指標分析を行っている。経済指標や住宅市場の指標など具体的な視点により丁寧に考察されている。セッションの中で「着工戸数の変化を４つの山として把握できるのか」との質問があったが、着工戸数だけではなく１戸当たりの坪単価や総額費用などによってもインテリアは異なるのではないかとの疑問が少し残った。今後その点についても分析を願いたい。

023　台湾の近代建築を支えた工手学校（工学院大学の前身）の卒業生である八坂誌賀助と梅澤捨次郎が行った事業の、現在の利用状況等の調査報告である。この２名は数多くの建築を手掛けており、著者らは〈機能を継続して利用〉〈文化的施設として再利用・保存〉〈一部のみ現存〉〈現存していない〉〈不明〉に分けて、考察している。研究テーマはとても興味深い。が、まだこの２名の手掛けた建築がどのような背景でどのように建てられ使われてきたのか、現在は時代を超えてどのように使いこなされているのか、もっと知りたいことがたくさんある。今後の研究の進展を待ちたい。

024　コルビュジェのカジェ・スタンダードをリデザインし、現代のマンションに即した新しい居住空間を提案するための研究である。熱意のある発表に好感が持てた。新しい居住空間の定義や、現在市販されているシステム家具やユニット家具との違いなど明確にすると、より研究の面白さが伝わると思われた。

025　子供の遊具を使った多様な遊びの働き（役割）を、行動場面の概念を応用して体系的に把握することを目的としている。現在は平日・休日ともに１日のみのデータであり、本人も予備的な知見として考察を行っている。訪れる子供の年齢や人数、同伴者、遊具の配置や公園の広さなど、子供が設置されている遊具をどのように連携させて遊びのストーリーを作成しているのか、今後が期待される。

【計画Ⅲ】

Ⅲ　０２６～０３０　　座長　渡辺秀俊

026は、デザイン系の女子大学１年生が、インテリアを評価する際に用いる形容詞句について分析したものある。1992年に行なわれた類似の既往研究と2014年に行われた本研究の結果を比較して、近年の傾向について分析している。評価させた対象が、インテリア関連雑誌とチェアという違いがあるため、12年間での若者の変化としてとらえることにはやや無理もあるが、定点調査により評価言語の時代変化をとらえようとした試みとしては価値がある。１年次生と４年次生の差異、プロとノンプロの差異などの分析に発展させると、インテリア教育の研究としても価値ある展開があるように思う。

027は、名古屋市に立地するマンションと商業施設が複合された施設における各種店舗を対象として、現地見学後の大学生に、認知度、景観の印象評価、満足度、利用願望などをアンケート調査したものである。各調査項目について詳細に報告された個々の結果は、開発・設計者の意図が、ねらい通りに実現したか否かの判断材料としては有効であろう。分析を深めて、この調査結果から導かれる人間と環境との普遍的な原理が抽出できると、今後、新たに展開されるこの種の街づくりに対しても応用可能な、一層有効な知見が得られるであろう。

028は、大型総合―スーパーの屋内外のパブリックスペースを地域交流の場として環境整備するために、広島市内の２件の大型総合スーパーの利用者を対象にしてアンケート調査したものである。利用者が考える市や区による支援の要望、屋内外のパブリックスペースの利用方法などについて報告があった。民間が管理・運営する商業施設の一部スペースに、市や区が費用や人的な支援を行うことで大型スーパーを地域交流の核とすることを志向する研究として位置付けられる。

029は子育てが一段落した40代女性が、大型総合スーパーの衣料店舗に求める要望について、就労の有無という点から調査したものである。その結果として、就労している40歳代以降の女性は「洗練された商品を扱い、歩きやすく見やすい衣料店舗」を求めていること、就労していない40歳代以降の女性は「ディスプレイなどで着ているイメージがしやすく、すっきりとした店内を持つ衣料店舗」を求めていることなどが報告された。本報告は、年代や就労状況などの利用者属性に着目して施設への要望を導き出している点に特徴がある。大型商業施設内のそれぞれの店舗は、ある程度、利用者層を想定した上で内装や品揃えを戦略的に決めていると考えられる。アンケート回答者が評価対象とした施設内店舗群のマーケッティングの考え方についてもヒアリングできたら、得られた結果の解釈がより一層深まると思われる。

030は、長崎市の西彼杵半島の沖合７㎞の角力灘にある周囲４㎞の池島の再生計画についての報告である。1959年から2001年まで炭鉱として栄えていた島であるが、現在では急激に人口が減少し、島内に点在する公共施設も老朽化が著しい。このような地域を現地調査した結果に基づいて、①港と学校を拠点として公共施設機能を２か所に集約すること、②島内に点在する観光スポットを結ぶ陸の観光ルートを構築すること、③池島と本

島・離島を結ぶ海の観光ルートを構築することが提案された。一般に、人口減少地域の再生計画としては、既存ストックを利用したコンパクトなまちづくり、地域独自の資源を活用した新たな産業の創設などが唱えられている。本報告もこの範疇に入る提案ではあるが、３大学共同で地域連携するという取り組みの実態は、今後のインテリア研究の実践方法を考える上で有益な情報であろう。

【計画Ⅳ】

Ⅳ　０３１～０３５　　座長　渡邊朗子

計画Ⅳでは、「インテリア環境評価に関する研究」について２編、「応急仮説住宅に関する研究」について２編、「避難所のパーソナルスペースにおける被災者の気持ちをいやす空間構成の研究」について１編、計５編が発表された。

031 032 「インテリア環境評価に関する研究」は、既に発表されている研究の続編で、その４では、インテリア環境カルテの概要について、発表された。環境カルテの評価要素として、インテリア計画に関わる基本要素である「省エネ」「安全」「健康」の３項目を中心に評価ツールを構成する指針などが論じられた。

その５では、具体的なインテリア環境カルテの使い方について、特にチェック項目の使い方について詳しく発表された。

033 034 「応急仮説住宅の集会所のイベント時の使われ方について」では、応急仮説住宅の集会所について、イベントの回数やイベントの種類、特徴など詳しい調査結果が報告された。

続く関連の「応急仮説住宅における平面図と展開図にみる家財の占有状況に関する事例的研究」では、制約された応急仮設住宅の空間の中で、家財の占有率の高い事例が報告され、収納率をあげる必要性が発表された。

035 「避難所のパーソナルスペースにおける被災者の気持ちをいやす空間構成についての研究」では、広島市土砂災害における避難環境について、被災者に実際にヒアリング調査を行い、ダンボールベッドが避難生活者に衛生面の向上や寝心地の良さ、パーソナルスペースの明確化等による一定の安心感をもたらした実情などが報告された。

「インテリア環境評価」についての２編の研究は、環境カルテの具体的な内容や使い方について詳細な提案が織り込まれており、実社会での有効性が多いに期待される。

後半の応急仮説住宅や避難所についての研究は、丁寧で綿密なフィールドワーク調査によって避難生活空間の実態を明確に炙り出しており、今後のそれらの施設計画に活かせる有用な知見が導き出された。

【計画Ⅴ】

Ⅴ　０３６～０４０　　座長　河内久美子

036 （一志、渡邊）は、物的環境デザインが個人の知的生産性へ及ぼす影響を考察するため、色彩環境に着目して高齢者を対象とした実験を行った報告である。知的生産性委員会の定める建築空間と知的階層モデルのうち、第１階層の情報処理に着目し、青と黄の２つの異なる色彩デザインを施したデザインパターンのブース空間で高齢者30名の被験者にモニターを用いた四則演算を課し、生理状態アンケートと印象評価アンケートを併せて行っている。学生を対象に実施した同手法の実験結果に比べ、正答率、疲労度の変化、気分状態の低下、ポジティブな印象のいずれも、高齢者の場合は壁面色彩の影響が少ない傾向が示された。知的生産性に影響する要素に年齢的差異があることが興味深い。

037 （馬場、渡邊）は、036同様、人の知的活動に関与する建築計画系物的環境の研究である。本編では個人の知的活動を支援する環境デザインの要素として、大きさと壁面色彩に着目し、大・小と白・黄を組み合わせた４パターンのブース空間において、42名の学生にモニターを用いた四則混合計算、活動前後の生理状態の確認、SD法を用いた印象評価を行わせている。実験結果から、情報処理の知的活動において、空間の大きさ（幅）が大きい方が脳活動を活性化させること、色彩と空間の大きさの組み合わせも知的活動に影響を及ぼすことが導かれている。単一だけでなく、複合した空間要素の影響について、今後も研究の継続に注目したい。

038 （為谷、渡邊）欠席

039 （小川、渡邊）は、T大学図書館におけるオープンスペースを取り上げ、利用パターンを想定した什器の配置と実際の使われ方の齟齬に着目し、利用学生の行動・人数・活動スペースの観察と全学生へのアンケート調査から、空間構成の考察を行っている。調査結果として個人的利用が多く、その実態に相応しい空間構成の必要が提案されているが、情報端末によるやり取りではなく、対面によるコミュニケーションの活性化といった、オープンスペースやラーニングコモンズの設置趣旨として、空間から行動を引き出す工夫・仕掛けに関する視点からの研究も期待したい。

040 （加藤、渡邊）は、「空間知能化」によって独居高齢者を見守るシステムを構築するため、学生を被験者として行った予備的実験の報告である。実験では、空間知能化環境をいかに居住環境として違和感なく成立させ、どのような環境機能が求められるかなどを探るため、実験空間、センサー、アプリケーション機能、見守りサービスの４項目について評価を行っている。タブレット端末や人感センサーを居住空間と結びつけ、空間そのものに認知機能をもたせる試みは、高齢単身者世帯が急増す

る中、実用化に向けた更なる研究が大いに期待される。

【病院・学校】

０４１～０４５　　座長　森永智年

041　在宅看護・介護の生体リズム確保するために、病院の看護師による専門性を活かしたシステムを構築するため、現状の看護師の対応状況を把握するアンケート調査の報告である。今回の調査結果がどのように活かされるかの問いに対して、現状の医療施設での生体リズムを看護師がどのように調整しているか把握できていないので、その現状と看護師の知識の有無による調整の仕方に差があるのか、調べたとのことである。

042　病院内食堂の建築設計的方策を知るための利用状況の調査報告である。利用者の属性、来店人数と占有席数、来店目的と滞在時間を調べた基本調査結果の報告である。一人につき１席の相当の余裕が利用者の要望としている。余裕の１席が荷物置場か対人領域確保のためなか、その目的まで明確にして欲しかった。

043　病院のあり方について、病気の治療には室内環境設備に頼るのではなく、自然光や通風などのパッシブなもの取り入れるべきであるという提案である。会場より、パッシブと病気を治すことに関係があるのかという質問に対して、重症の患者は少数であり別に考えると、大半は外来患者も含めて軽傷であるので、パッシブな環境が生体リズムの回復を促し、本来人が持つ自然治癒力が高められるとのことである。

044　妊産婦と助産師による院内助産分娩空間の評価の違いについての報告である。おおむね評価項目についての回答は同様な評価傾向を示すが、項目別にみると役割の違いにより評価数の得点差が生じていた。助産師は医療環境としては評価得点が低いとしている。一方、妊産婦は付添家族への配慮に対する評価得点が高い。評価ポイントを医療行為のリスクの低減に置くのか、妊産婦の顧客満足に置くべきか判断する材料が欲しい。

045　20年後に少子化が予測される地区の小中学校の建築対応のあり方に関する報告である。児童減少による小学校と中学校の段階的な統合化を含む施設の減築の提案である。また、移転後の小学校の地域複合施設としての活用についてのものである。地域に分散されている施設を一元化すると様々な支障がでてくるが、その検討の有無について会場より質問があった。

【家具・人間工学Ⅰ】

Ⅰ　０４６～０５０　　座長　高橋未樹子

046　煙の視覚的影響に着目し、煙発生時に滞在場所から避難場所に至るまでの動線・視野の状況・避難時に手掛かりとするものについて、ロービジョン者と晴眼者との比較を行っている。通常の緊急時のように非常ベルが鳴った状態で検証実験を行っていること、被験者が検証施設を使い慣れているか否かによっても結果が変わる可能性があることについて、質疑が交わされた。

047　災害時の避難所を想定し、視覚障害者の歩行を誘導するブロックの代わりとなるガイドロープについて、ロープの太さや本数、設置間隔を変えて検証実験を行っている。背景となるバリアフリー法からなぜ実験場所を避難所に想定したのか、被験者が靴を履いていない状況で実験を行ったことなどについて質疑が交わされた。

048　収納時の身体負荷を、収納高さ・姿勢・収納物の視点から、筋活動と重心の変化について調べた研究である。225㎝×305㎝×100㎝、重さ2,020gの収納物を、高さ20～200㎝の高さで10㎝間隔で収納し、その際の右側上腕二頭筋、右側腓腹筋、右側体幹直立筋の３ヶ所の筋肉活動と重心の動く範囲により、適した収納高さを調査。体格や収納物の重さ、形状によっても適正値が異なると考えられるので、継続した研究を望む。

049　１日に８時間も座ることがある椅子について、昨年はその適したクッション性について報告された。しかし、クッション材料が適切であっても、上張材が不適切であれば求められるクッション性を得られることができないことから、今回は上張材がクッション材にどのような影響を及ばすのか、高齢者の筋肉特性を考慮して報告された。

050　48年前に発表された「いすのプロトタイプ」に2009年に追加された０タイプを含めて現在７つある椅子のタイプにおいて、原典の原寸図を詳細に測定し分析することにより、各タイプに共通な寸法・角度の法則性を見出し、設計に使いやすい「いすの資料」の作成について報告された、この測定・分析は、東洋医学書に重要な経穴であると示された「命門」をポイントとして行われた。

【家具・人間工学Ⅱ】

Ⅱ　０５１～０５５　　座長　藤原成暁

051　壁厚を収納に活用した研究で、今回は玄関におけるシューズボックスとしての利用について考察している。木造住宅の標準とされる105㎜角柱を想定した内法奥行129㎜に成人の靴を収納するため靴を縦置きとし、更に壁面にバーを横に流して踵部分を引っ掛ける方法を取っている。注意したいのは、靴の爪先が床に当たらないようにすることで、そのためには靴が壁面から外れないように引っ掛け金物の形状と位置に工夫が必要となる。今後、老若男女様々なタイプの靴に対応できるようなシューズボックスになることを期待したい。

052　人生の約１／３は睡眠時間に充てられる。従って住環境としての寝室空間の皮膚に直接触れる寝具はおろそかにできない分野である。本研究は、衛生的で安価なポリエチレンパイプ素材を対象にした交換可能なカセッ

ト式枕の比較研究である。各ユニットタイプの評価を行った結果、好まれない枕の傾向として「中央部と両サイドの高低差が大きいもの」、「バランスが悪く中央が高めのもの」としている。この種の研究の難しさは、寝心地の良し悪しには個人差があり、その良いと感じる好みが必ずしも自分に合う枕であるとは限らず、楽な状態が逆に人体に歪みをつくる原因にもなるという点である。寝床の状態（体の沈み具合）との相関性にも配慮し、様々な角度からの研究が望まれる。

053　本研究は、新素材の畳（表）がどのように生活者に受け止めているかを明らかにしようとするもので、男女51名を被験者として９種の実物大の畳の評価を行っている。結論として、評価が高い畳はイグサに近い和紙と樹脂で、柔軟な畳ほど好まれる。また、高齢者ほど自然素材のイグサを好む傾向があり、若年層はレザーの評価が高いということであるが、更に本研究を進めるに当たり、低農薬有機自然素材の減少、イグサから新素材に代わらざるを得ない理由や時代背景なども視野に入れた研究を望みたい。

054　本研究は、多機能トイレの乳幼児連れ利用者調査の続編としてベビーカー不使用（抱っこ紐利用者）の場合の詳細な動作分析である。乳幼児ベッド、着替え台、乳幼児椅子の基本的な３点セットを中心に、フックの取付け高さから光る金物に反応する児童心理に至るまで言及している。図２、３でそれぞれ折戸タイプと引戸タイプをブースＢ１、ブースＡ２として比較対象しているが、紙面の制約からか写真が小さく読み取り難いのが残念である。ポイントだけをイラスト化すると分かり易かったのではないかと思う。本調査で明らかになった結果が、今後省スペースにおける安全で機能的な空間づくりに応用されることを期待する。

055　人が歩いて梁下通過をする際、頭上とのクリアランスをどのくらい必要とするのか、建築計画上、心理的感覚も含めて興味深いテーマである。平坦路・斜路・階段（上り・下り）のそれぞれについて具に考察している。その結果、平坦移動の場合、頭上のアキ寸法は概ね100㎜前後であり、斜路・階段の場合、下りは上りに比べて大きく取る必要がある。また男性より女性の方がより大きなアキ寸法を必要とする傾向がみられたという。本報告は色彩のないモノトーンの空間での実験と思われるが、同じ形状でも壁に濃淡を付けた場合、あるいは着色した場合など、また異なる空間認識になると思われる。

【感性・教育】

０５６～０６０　　座長　布田　健

インテリア学会を含め、インテリアや建築に関連する発表全般に言える傾向だと思うが、新たな研究手法の出現が研究テーマに与える影響は大きく、最近では手法からテーマが見つかる事も珍しくない。研究を始めた頃の我が身を振り返ると、テーマが決まっていても、どう分析すれば良いのか途方に暮れていたはずで、やはり隔世の感を禁じ得ない。本セッション【感性・教育】においても、脳波や3Dプリンターなど、先端技術や新技術を用いた研究手法による研究・開発の発表が行われた。また、古民家再生や地域と連携したワークショップの取り組みなども、最近の教育のトレンドであろう。

056の小玉らの「インテリア空間における色彩と感性に関する基礎的研究」は、脳波解析から心の状態を定量的に分析することを試みている。具体には、インテリア空間における色彩の占める量と感性の関係を紐解こうとしている。タイトルにある様に基礎的研究であり、個別のデータ蓄積や実験方法の確立を試みるものと理解した。脳波をどのように判断するのか、その材料もあまり整備されていない現状の中で、しばらくは地ならしの期間かもしれないが、着実にデータ整備が行われることを期待したい。また本研究の活用、すなわちインテリアに向けた着地点についても、早めに示して頂きたい。

057の森永の「インテリアの専門家と非専門家の認知構造の違いについて（その２）」は、「言語的刺激（言葉）」と「非言語的刺激（画像）」の関係性から、専門家と非専門家の認知構造の違いについて可視化することを試みている。端的に言えば、専門家は言葉の引き出しを多く持ち、そこからイメージ出来る空間の引き出しも多い事を構造化したものであろう。インテリアデザインは当然施主などの相手が居るわけで、この引き出しを充実させ理解してもらうことが教育としても重要であり、本研究の活用点でもある。ただし、言葉に出来ないデザインももちろんあるわけで、その辺りの感性は個別に磨く必要があることは言うまでも無い。

058の渡邉らの「長野県須坂市の古民家を利用した実践型「ものづくり教育」その２」では、教員と学生が須坂市の古民家を改修し地域拠点として活用すると共に、そこでの凧づくりや伝統食づくりの地域交流の様子について報告があった。今後も同様の活動が続くと思われるが、ぜひ本活動から「学生」や「地域」がどのように変わっていったか、その後の調査分析をお願いしたい。

059の細野らの「排水部品のデザイン構築における学外実践研究」は、大学の学生と企業がコラボレートし商品開発を行うという、学外での実践的な研究である。知財や守秘義務などの開発に関わる取り交わしなど、インターンシップのあり方についても言及している。また企業では当たり前になりつつある、デザイン化から３Dプリンターで作ったモックを用いた機能の確認などのデザインプロセスについて、早いうちに学生が体験出来る事は大変良いことだと思う。

060の山内の「デザイン系学科における実技科目の教育

実践Ⅲ」では、工科高等学校における印刷技術に関する教育、主にフルカラー印刷を４色（シアン、マゼンダ、イエロー、ブラック）から無限の色を表現する方法について、学生が理解しやすい指導方法について報告があった。コンピュータを用いた色分解、先の４色を微少なドットで重ねて印刷し無限の色を表現する事を、アナログ印刷機の操作から、その工程を学生に理解させた。これらの方法は、学生に向けたSD法の授業評価においても、教育的に効果があったとしている。今後は、これら教育手法がインテリア領域にどのように応用されるかを含めて、研究をお願いしたい。

【歴　　史】

０６１～０６５　　座長　高橋敏郎

061 （八代、河田）は、八代のヨーゼフ・フランクに関する一連の論考の続報である。前稿の「象徴としての建築」東アジアへの分析から、今回は日本に焦点を絞りジャポニズムとして捉えようとしたものである。日本建築の透明性が石造建築の閉ざされた空間の文化に与えた衝撃と「日本は人間、自然、芸術の概念を修正に導いた」とする自然と造形芸術の関係を称揚する言葉を紹介する。フランクの道具（茶道具）からの感銘を紹介するが、空間とデザインに見られるジャポニズムが、言葉とどのような関係にあるのかはまだ提示されていない。今後の研究が待たれるところである。

062 （川崎）は、前年のコロマン・モザーの模様の分析から展開された「モザーとホフマンの「ウィーン工房」設立以前の協働による住宅の文様と色彩」についての研究で、４軒の住宅における詳細な分析を行ったものである。ボラック邸、ヘンネベルク邸における曲線の模様、ヴェルンドルファー邸、ザルツァー邸における幾何学模様など、興味深い画像が多数提示された。分析では、モザーは有機的模様を好み、ホフマンは無機的模様を採用しているとし、２人の協働による住宅と、モザー単独の住宅では模様が違うと分析する。空間についての考察が希薄であることと、19世紀末からの西欧のデザイン潮流の中での位置づけが十分なされれば、いま少し深く掘り下げることが出来よう。今後の研究に期待するものである。

063 （井上）は、一連の研究の第３報である。19世紀のクルックシャンクの風刺画をとり上げて、画中にある陶磁器について紹介している。中流階級の家庭における小型陶磁器、フィギア（？ノベリティー）が19世紀中ごろにはインテリアに現れてくるとしている。着想としては興味深いもので、今後も注目して見てゆきたい。

とはいえ、この研究の落ち着く先がいまだ判然としないという懸念を抱いているのも一方にあり、各回ごとに一定の成果を報告できることが望ましいと言えるのだが。

064 （塚口）は、モダンデザインの背景を探る研究の８回目となる。ここでは「東欧ユダヤ人のアイデンティティ希求と重ねて」と題しモダン運動を支えた動きが第２次世界大戦前夜まで見受けられるとする。大変興味深いテーマと、画像を紹介され、今後の研究の成果に期待するものである。奇しくも、062（川崎）でもとり上げられた、ヴェルンドルファーのミュンヘンの邸宅がその最初に現出したのも興味深いところである。質疑応答の中で、座長として質問したのだが、筆者が研究するところのモダンデザインとは何かが気にかかるところである。

「アールヌーボーを含め19Ｃ中から20Ｃに至るデザインをモダンと位置づけ」という答えは、歴史を扱うものとしては大雑把にすぎるきらいがある。用語の定義を明確にすることで新たな地平も見えてくるように思われるのだが。

065 （藤原）は、昨年に続き西村伊作の家具に関する研究の第２報である。当初ヴォーリスに設計依頼された倉敷教会が、最終的に西村に依頼されることになった経緯から、計画段階で依頼人の木村らが見学した京都御幸町教会、京都教会、洛陽教会、浪速教会と伊作による倉敷教会の礼拝堂椅子の比較検討したものである。図面も提示され、かなり興味深い内容である。今回の結論が「無益の装飾を少なくして、単純な美しさを」追求したとするが、礼拝堂の一般椅子は無装飾が一般的であるので、いま少し結論を精査する必要があるかと思われる。さらなる研究が待たれるところである。

＊これは歴史全般の論文（口頭発表）に感じていることではあるが、貴重な資料を発掘され紹介されながら、そこに論が見えないことがしばしば見受けられることである。単なる報告に終わらず、発表者の方々の精進を期待したい。

【パネル部門】

０６６～０７０　　座長　佐伯高基

066 「オフィスインテリアのトレンドについて」

社会人にとってオフィスは、一日の活動の半分以上を過ごす場であり、その空間は、企業の生産性向上とワーカーが快適に作業できるワークスペースに焦点をあてた世界レベルの展示会での考え方や、環境での空間提案が基本として求められるべきととらえ、２大展示会を視察した現状報告である。オフィスのスタイルとしては、「籠り空間」と「健康」をあげ、ファブリック素材感の柔らかさ、優しさと吸音効果がオフィスに有効な機能を与え、今までの「白い」無味無臭のスペースから快適性を軸としたインテリア空間として、カラー・素材と共に両立していると注目している。オフィスメーカーとして

世界統一を視野に入れた日本発信によるオフィストレンドの確立に向けて、さらなる深い研鑽を期待したい。

067 「照明入り額絵……白色LEDプレートと和紙造形の組合せ」

和紙造形の視覚的感覚、透光性、透光での色味などの特性を考慮したシリーズ展開に、白色LEDを組合わせた額絵のデザインの発表とその展覧会の報告である。複数生産を目指し、和紙造形表現の同一性の確保に重点を置き、型による和紙一体成形手法での有効性、効率化を見いだしている。「折り曲げ」手法の部分的展開ではバリエーションが生まれ制作難度や部品数の点で製品化に向いているが、全面的適用では、手技での難易度もあり製作時間コストの面で折り曲げ加工の機械化も検討されており、実現に向けての開発が待たれる。扇状に折り曲げた部品や「水抜き和紙」を取り入れた構成、染色和紙による小円部品の利用など額絵としてかなりの好評を得ている。今後も和紙の特性を活かした平面的構成の額絵の展開例の発表と、同一デザインの製品が再現・生産できる製作手法の開発を期待したい。

068 「模型による光の効果の検討と実空間の比較」

教会は多くの人々が関わる建築であると同時に、全員参加型の住宅的感覚を併せ持つことが要因とされ、設計競技での要項には教会のコンセプトだけではなく教会設立以来の雰囲気などにもあらわれるとしている。祈りの空間のインテリアを決定する光のイメージこそが感覚的共有においては決め手であり、繊細なニュアンスが伝わる模型表現が効果的である。模型写真は実空間と同じ雰囲気となることが必須で、空間共有のコンセンサスは写真で得られ、最終段階までの契約条件ともなるとしている。４つの教会例では、提出模型写真と実空間写真が示され、模型製作におけるインテリア空間の検討と光の効果の工夫、実空間に置き換えた時の実現性が紹介された。今後も教会建築設計での活躍と実例発表を期待したい。

069 「段ボールを使用した組立おもちゃ（ダンカード）」

祭事の子ども寄せに設置した「段ボール迷路」は製作に長時間を要し子どもたちが待ちきれないことから、手ごろな遊具・玩具がないかという意見をうけて提案されたものである。試作品を実際に遊びに使用しながら問題点を探り、適度な厚み・切り欠き巾・深さを採用し、３種類の基本矩形を考案し、強度や組み立て時の安定性にも十分耐えうることを検証している。方向変換や飾りとしてのコネクターの必要性にもふれ、かなり自由な造形活動が可能なものになっている。適正価格となる材料の調達、多数回使用での耐久性・防湿性などの問題点を克服し、子どもたちの創造力、構築力を育てるものとなるべくダンカードの改良と新商品の開発を期待したい。

070 「産学共創における　ダンボール収納BOXのデザイン」

県のデザイン共創促進事業支援により企業から依頼のあった「ダンボールの特徴を活かした収納ボックス」のデザインをテーマとした、学生たちとの商品開発の報告である。既成製品の経緯から可愛らしさを継承しつつ、シンプルさと使いやすさを盛り込み、ひとり暮らしの社会人女性にも受け入れられやすいもの、「猫」をキャラクターとして取り入れて詳細を進めている。提案したBOXはＡ４ファイリングが収まる正方形を基本とし、並列して並べた際は押し入れの奥行きに収まり、衣替えなどでの使い勝手のよさなどの発想を見いだしている。事業に参加した学生たちが、今後どのような教育的効果を得ていくのか、調査とその検証を期待したい。

■平成27年度日本インテリア学会 総会　議事録

平田圭子（広島工業大学）

日　時：平成27年６月20日（土）13:30～14:20
会　場：千葉工業大学　津田沼校舎
出席者：直井、加藤、西出、上野、内田、片山、金子、河田、河村、栗山、小宮、白石、鈴木（敏）、建部、早野、平田、棒田、渡邊（秀）、上原、桑原、松崎（以上21名）

配布資料：

１）平成27年度日本インテリア学会 総会資料
２）平成27年度日本インテリア学会（参考資料）
３）九州支部活動報告
４）平成27年度第１回理事会入退会者名簿（2014年10月27日～2015年６月20日）
５）平成26年度日本インテリア学会第２回理事会議事録
６）平成26年度日本インテリア学会総会議事録
７）インテリアプランナー資格の変更について
８）日本インテリア学会第22回卒業作品展

議　事：

１．開会宣言（金子）
２．会長挨拶（直井会長）
３．定足数の確認（金子）
　出席者は21名、委任状126通、合計147（定足数87）となり、総会の成立に必要な定足数（会則15条）を満たしていることが確認された。
４．議長選出
　議長および書記の選出に際し、事務局一任となり、直井会長を議長、平田理事を書記として、議事録署名人に早野理事と渡邊理事が推挙され、議長の直井会長より挨拶があった。

5．第１号議案：平成26年度　事業報告および決算報告（案）の件

・白石総務委員長より、平成26年度の事業報告および決算報告（案）について、資料１に基づき説明があった。佐藤・上野（弘）両監事による監査報告（棒田代読）があり、平成26年度の事業報告および決算報告（案）は、資料１（P1）の通りで異議なく承認された。

6．第２号議案：平成27年度　事業計画および予算（案）の件

・白石総務委員長より、平成27年度の事業計画および予算（案）について、資料１（P2）に基づき説明があった。

・加藤副会長より、事前に行われた理事・評議員会において、討議された「インテリアとは何か？」について、今年度の事業計画に記載するよう意見があり、異議なく承認した。

・平成27年度の事業計画および予算（案）について、資料１（P2）の通りで異議なく承認された。

7．その他（白石）

・今年度の役員について、資料１の３ページの案の通りとすることで、異議なく承認された。

・事前の理事会において議論された、学会活性化策の２つ、①工業高校および大学との連携、②「インテリア・生活デザイン検定」について、今後十分な議論を重ね、会員の理解を深めながら慎重に進めることが報告された。

・準会員は、卒業後に就職するなどして連絡がつかなくなる場合が多いため、入会後２年後に正会員へ移行するか退会するかの確認を行い、返答がなければ自動的に退会とする旨、了承が得られた。

・直井会長より、論文審査委員長が渡辺理事に交代したが、今後、各委員会の委員長、部会の部会長にも若手の登用を推進する旨、報告があった。

・白石総務委員長より、編纂中の「インテリアの百科事典」について、現在校正作業を進めており、近日中に出版予定である旨、報告があった。

・第27回金沢大会について（棒田）
10月24、25日、北陸支部で金沢大会が開催される。準備は90％まで進んでおり、近日中に日程や申込書を郵送する予定である。開催時期は、ホテルが大変混み合うため、早めの宿泊予約をするよう依頼があった。

■平成27年度日本インテリア学会
第１回　理事・評議員会　議事録

棒田邦夫（金沢学院大学）

日　時：平成27年６月20日（土）11:00～12:50
会　場：千葉工業大学 津田沼校舎
出席者：直井、加藤、西出、上野、内田、片山、金子、河田、河村、栗山、小宮、白石、鈴木（敏）、建部、早野、平田、棒田、渡邊（秀）〈以上理事18名〉
島崎〈顧問〉
上原、松崎〈評議員〉

配布資料：

１）平成27年度日本インテリア学会 総会資料
２）平成27年度日本インテリア学会（参考資料）
３）九州支部活動報告
４）平成27年度第１回理事会入退会者名簿（2014年10月27日～2015年６月20日）
５）平成26年度日本インテリア学会第２回理事会議事録
６）平成26年度日本インテリア学会総会議事録
７）インテリアプランナー資格の変更について
８）日本インテリア学会第22回卒業作品展

議　事：

１．開会宣言（議事進行：白石総務委員長）

２．会長挨拶（直井会長）

３．定足数の確認（白石）
理事出席者18名、委任状６通、合計24（定足数13）で、理事会の成立に必要な定足数（会則15条）を満たしていることが確認された。また、評議員では、出席者は21名、委任状26通、合計47（定足数33）で、成立に必要な定足数を満たしている。配布資料を確認の上、議事に移った。

４．第１号議案：平成26年度　事業報告および決算報告（案）の件

・白石総務委員長より、平成26年度の事業報告および決算報告（案）について、資料１に基づき説明があった。佐藤・上野（弘）両監事による監査報告（松崎代読）があり、平成26年度の事業報告および決算報告（案）は、資料１（Ｐ１）の通りで異議なく承認された。

５．第２号議案：平成27年度 事業計画および予算（案）の件

・白石総務委員長より、平成27年度の事業計画および予算（案）について、資料１（Ｐ２）に基づき説明

があった。

・次年度繰越金が前年より約100万円減っていることから、必要最低限の活動費を確保して、その他をかなり削減した予算となっている。

・河田理事より、前年度の決算報告〈収入の部〉「事業収入」と今年度の予算（案）〈収入の部〉「事業収入」で、備考の記載内容が異なっているとの指摘があり、統一するとの回答があった。

・平成27年度の事業計画および予算（案）について、資料１（P2）の通りで異議なく承認された。

６．学会の活性化策について

・島崎顧問より、学会活性化の策として、下記の二項目が提案された。

(1) 工業高校と大学の協力関係をこれまで以上に推進すること。特に全国高等学校インテリア科教育研究会（全イ研）との交流を深めていく。

(2) 会員数増加の具体策として、「インテリア・生活デザイン検定」を創設すること。生活を基盤としたインテリアの知識を一般の人々に広め、活性化につなげる。

・以上の二項目の方法などについて、賛否両論意見があったが、今後は十分な議論を重ね、会員の理解を深めながら慎重に進めることとなった。

７．その他

・資料４の通り、前回理事会以降の入退会者が承認された。

・教育部会の活動について、運営費用が嵩んでいる状況が続いており、策を講じるため検討する。

・各委員会の委員長、部会の部会長に若手の人材を登用する方向で次回の理事会へ向けて調整する。

・準会員については、卒業後に就職するなどして連絡がつかなくなる場合が多いため、入会後２年後に正会員へ移行するか退会するかの確認を行い、返答がなければ自動的に退会扱いとすることが承認された。

・会員が出産等により休職する場合の対応について、会則では「休会」の規定がないため、検討する。

・論文審査委員会について（直井）

松本（直司）理事から論文審査委員長辞退の申し出を受けたため、今年度から、渡辺委員長、平田副委員長の体制で運営することが承認され、両理事より就任の挨拶があった。

・白石総務委員長より、昨年度新たに賛助会員が入会したこともあり、総会・シンポジウム、大会での展示など、会員サービスの観点から企業との交流を促進したい旨、報告があった。

・直井会長より、編纂中の「インテリアの百科事典」について、現在校正作業を進めており、近日中に出版予定である旨、報告があった。

・第27回金沢大会について（棒田）

10月24､25日、北陸支部で金沢大会が開催される。準備は90％まで進んでおり、近日中に日程や申込書を郵送する予定である。開催時期は、ホテルが大変混み合うため、早めの宿泊予約をするよう依頼があった。

・次年度第28回大会開催地について（直井）

平成28年度の大会開催地が未定であるため、関東または東海を候補として、本日総会のあとに当該役員と相談する旨、報告があった。

・事務局宛名の変更について（白石）

平成28年度より、事務局の住所が「千葉工業大学工学部 デザイン科学科 上野研究室」から「創造工学部 デザイン科学科 白石研究室」に変更となる旨、報告があった。また、２～３年後を目処に事務局移転の検討を願う報告があった。

・関東支部より会員メールアドレスの情報提供依頼があったが、セキュリティ上の問題、全員分のアドレスが揃っていないことなどを理由に、今回は見送ることとなった。

・西出副会長より、資料７に基づきインテリアプランナー資格の改訂について説明があった。資格の普及と活性化を目的とし、学科試験（誰でも受験可能）に合格した者が「アソシエイト・インテリアプランナー」として登録可能となる。その後、設計製図試験の合格と実務経験等の登録要件を満たすものは、「インテリアプランナー」の資格を得ることができる。

■平成27年度日本インテリア学会 第２回　理事会　議事録

松崎元（千葉工業大学）

日　時：平成27年10月25日（日）９：00～９：50
会　場：アパホテル金沢駅前　１階「こはく」
出席者：直井、加藤、西出、上野、内田、小澤、片山、金子、川島、河田、河村、小宮、白石、鈴木、建部、長山、早野、平田、棒田、松本（直）、松本（吉）、森永、若井、渡辺　〈24名〉

配布資料：

１）平成27年度 第２回 理事会 議事次第
２）平成27年度 第１回 理事・評議員会 議事録
３）平成27年度 総会 議事録
４）平成27年度組織（表記の修正）（案）
５）論文報告募集規定（送付先の修正）（案）

６）入退会者名簿（2015年６月21日～10月24日）
７）東北復興支援インターンシップ参加者募集

議　事：

１．開会宣言（議事進行：白石）
２．会長挨拶（直井会長）
３．定足数の確認
　本理事会の出席者は25名中24名で、理事会の成立に必要な定足数（過半数：会則17条）を満たしている。
４．前回議事録の確認
・平成27年度第１回理事会議事録（資料２）を確認し、資料１の次第に基づいて議事を進行した。
５．審議事項１：学会活性化ついて
・検討が進められてきた「インテリア・生活デザイン検定」は、学会として馴染まないとの理由から、島崎顧問より取り下げの意向が示され、中止することで了承された。（直井）
・学会活動の若返り、後進への引き継ぎを進めるため、資料４の通り「活性化委員会」を設置することが承認された。（白石）
６．審議事項２：広報委員会メンバーについて
・広報委員会の委員は、来年度より各支部から１名を選出し、各支部持ち回りにより会報原稿の取りまとめを担当することで了承された。また、毎号順に支部活動の紹介を記事にすることで、更なる活性化を図りたい。（白石）
７．審議事項３：論文報告集募集規定の改定について
・論文審査委員会の渡辺委員長より、平田副委員長が国内の論文報告集、渡辺委員長が AIDIAの論文集を担当することが報告された。今年度のAIDIAは４編の応募があり２編採用、国内論文の投稿期限は10月31日で、３月30日に発行予定である。
・資料５の通り、論文報告集募集規定の投稿論文送付先を広島工業大学の平田研究室に変更した。
８．審議事項４：次年度大会の開催地について
・東海支部の河田支部長より、次年度の大会を東海支部で開催する旨、報告があった。
・今後日程の検討を行い、例年と同時期で、大学を会場候補として調整を進める。（河田）
９．審議事項５：入退会の承認について
・資料６の通り、前回理事会後の入会者28名と退会者５名が承認された。
・今大会では学生の発表が多く、準会員の増加が顕著であった。今後も会員増を期待したい。（白石）
10．審議事項６：その他
・部会活動の活性化、若手への引き継ぎなど、今後の研究部会のあり方について、直井会長と栗山理事を中心に、検討する。
11．報告事項１：「インテリアの百科事典」（丸善）について
・直井会長より「インテリアの百科事典」は最終の校正段階で、近日中に発刊される見込みである旨、報告があった。
12．報告事項２：大会プログラムにおける発表資格の掲載について
・これまで大会における発表者の会員資格が、正しく表記されていなかったため、来年度より正会員と準会員の個人会員のみが発表資格をもち、賛助会員の企業担当者などは含まれていないことを、分かり易く明記する。（白石）
13．報告事項３：事務局について
・現在、事務局を千葉工業大学の上野研究室に置き、学会の封筒にも記載しているが、上野理事の現職退職に伴い、来年４月から同大学の白石研究室に変更する。（白石）
14．報告事項４：その他
・若井理事より、第１回の大会優秀発表賞を受けた大学院生が、奨学金の返済を免除されたことが紹介され、表彰の意義と感謝の意を述べた。
・今回は、発表室が分散し多くの学生発表は見られなかったが、表彰式で受賞者に会うことができ、よかった。（西出）
・事前に学生発表者の名簿と梗概原稿を審査員に送付しておくのがよいのではないか。（小宮）
・西出副会長を中心に、大会優秀発表賞のより良い審査方法の検討を進めていただきたい。（直井）
・その他、大会の事前準備、発表会場、発表方法、懇親会についても議論がなされたが、次回大会運営の参考とする。
・東日本大震災課題検討部会の川島部会長より、資料７に記載の通り、「東北復興支援インターンシップ2015」の参加者募集について説明と寄付の依頼があった。
・松本直司理事から、日本学術会議が中心に進めている「防災学術連携体」に本学会も参加するべきであるとの意見があり、検討することとなった。

■平成27年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長　白石光昭（千葉工業大学）

本年度の大会は参加者も例年になく多く、盛況の内に終えることができました。まずは、開催して頂いた北陸

支部の皆さんに感謝申し上げたいと思います。大会は学会の大きなイベントであり、多くの方の協力なしには開催できません。お忙しい中、本当にご苦労様でした。

私達の活動としては、大会時の受付に本部事務局の受付を設置して頂き、新規会員や発表登録料の徴収を行いました。今年は申込みの段階で新規参加者が多いことがわかっていたため、事務局の押切さんの方から事前連絡をしていただいたので、滞りなく進めることができました。

また、今回は大会実行委員会からの依頼で、特別に梗概集の原稿のとりまとめ、プログラム編成をお手伝いいたしました。学生論文発表賞も２年目となり、西出先生を中心に無事に進めることができました。総務委員会もその準備のお手伝いを致しました。今後は新しい組織等を作り、さらに発展させていけると良いと考えております。さて、総務委員長を引き継ぎ１年が経過しましたが、至らぬことが多く、会員の皆さんにいろいろご心配やご迷惑をおかけしております。学会運営も大会同様、皆さんのご協力なしには進めることはできません。会員の皆さんのご助言、参画をお待ちしています。

□広報委員会

委員長　湯本長伯（日本大学・神戸大学）

広報委員会の活動は学会内で最も表に現れているので、毎号皆様も知っている報告になり、且つ余り変わり映えしない報告となるが、今号は少し違うものになる。私が1990年代に広報委員長をお引き受けしてから、四半世紀近い年月が流れてしまった。気が付いたらこの長さであるが、九州大学・日本大学という２つの大学を定年退職し自由人になる機会に、今年度を以て引かせて戴き後任の方に後事を託したいと思う次第である。この年度末年報号が最後の編集となるが、私以外にも多くの方が広報委員会を退任されて些か心もとないので、全国の皆様の応援を改めてお願いする次第である。支部１委員の原則順守を期待したい。

今まで敢えて申し上げて来なかったが、今号も原稿の集まりは芳しくなく、なかなか年間３号、４号という発行は難しい。また事後の報告ばかりでは余り魅力も無いので、『インテリアの行方』や各氏からの寄稿など、読める内容を試みたりもしたが、これも上手く行っていると迄は言えない。学会としてジャーナルの発行は義務付けられているとは言え、どの学会も学位に繋がる論文集はまだ良いとして、どのようにして会誌を読んで貰うか四苦八苦している。私には答えが出せなかったが、後任の編集委員長に後事を託す以外にないだろう。

メイルニュースも、全ての全員には届いていない。今ほとんどの学会がお知らせはメイルニュースに絞り、ジャーナルは正規の記録の共有としていることなど、今後もう一度、会誌会報の在り方を再検討することが良いと思う。

私自身は今後、関西の大学の客員教授として少し地域を替えることになるが、比較的に元気な関西支部・東海北陸支部・中国支部のような元気さが、全国に伝搬するような仕掛けもまた考えて戴けば幸いである。

なお次号からは、棒田邦夫広報委員長に託すことになる。次号には次期委員長の決意表明もお願いしてあるので、私自身も楽しみに新しい展開を待つこととしたい。取り敢えず、退任の意思表明をさせて戴き、今後の議論に期待したい。

長い間、有難うございました。

□国際委員会

委員長　加藤力（京都大学）

今号は、特にありません

□論文審査委員会

委員長　渡辺秀俊（文化学園大学）

平成27年度から論文審査委員会の委員長を務めさせていただくことになりました。微力ながらご迷惑をおかけしないようにお手伝いさせていただく所存でおります。至らぬところが多々あるかと存じますが、ご理解とご協力の程よろしくお願いいたします。

また、本年度からの新委員長の力不足を補うものとして、論文審査委員会に副委員長のポストを設けました。副委員長は、広島工業大学の平田圭子先生にお願いすることになりました。当面は、アジア地域のインテリア学会関係論文集AIDIAについては主に渡辺が、国内のJASISの論文報告集については主に平田先生に担当していただくことで、論文審査業務を分担して進めていく予定でおります。

AIDIAの論文については、本年度は８月中の国内審査を通過した２編がジャーナルとして掲載される予定です。発行予定は10月末との連絡がAIDIA事務局からありましたので、近々に拝読可能かと期待しています。なお、AIDIA事務局の担当国は数年ごとに移動しており、昨年までは韓国室内デザイン学会が担当でしたが、今年はタイのインテリアデザイン学会が担当しています。

JASISの国内論文については、今年は例年にない多数の応募があり、現在、査読中です。査読委員の方々には多くのご負担をおかけしていると存じますがご容赦ください。予定では論文報告集は2016年３月発行です。なお、2015年10月25日の理事会にて、論文報告集募集規定における「論文の送り先」が改定されました。日本インテリア学会のホームページにてご確認ください。

近年、本学会における論文投稿が増加していることは、インテリア研究の領域の拡大と振興という点では、社会的に大変有意義なことだと思います。研究倫理という点から、また学会のコンプライアンスとしても、論文の応募に際しては、論文報告集募集規定ならびに原稿執筆要領を学会ホームページにて、事前にご確認いただきますようお願い申し上げます。

■平成27年度支部だより

□北海道支部

支部長　小澤武（小澤建築研究室）

今号は、特にありません

□東北支部

支部長　早野由美恵（東北芸術工科大学）

本年度の東北支部総会および記念講演会等は、平成27年11月28日（土）に東北芸術工科大学において開催いたしました。内訳は本年度の事業報告と決算報告、次年度の事業計画案と予算案が審議され、原案通り全会一致で承認されました。

総会終了後、早野支部長による「探究型学習・デザイン思考による研究」の実践報告、本会理事・前東北支部長の若井正一氏による「海外の生活文化に学ぶデザインの知恵袋」（副題～ソールズベリーからバウハウスまで）という記念講演会が開催されました。その後、山形市内のプロテスタント教会、第８回木の建築賞（NPO木の建築主催）、日集協集成材建築賞受賞の本間利雄氏設計の「水の町屋七日町御殿堰」等、山形の街並を見学した後、現存する蔵を今日（こんにち）新たに活かそうと、市内の学生達のプロジェクトで実現した蔵のレストラン「灯蔵（オビハチ）」にて懇親交流会が開催されました。

この蔵の出来た経緯は、明治時代に街を飲み込む大火事があった山形市では、その後の施策により防火性の高い蔵が盛んに建てられたそうです。当時はモノを大切にする時代であり、蔵は大切なモノ（財産）を保管する場所でした。しかし現在はその数も少なくなり、現存している蔵もあまり用途のない物置とされているケースが多いそうです。そこで、市内の学生らが山形の街並、街づくりを考える取り組みとして始めたプロジェクトの一環によって、第一号として生まれ変わったのが、蔵レストランだそうです。現在は中心市街地化のネットワークの拠点として、オーナー自身もこの建物を活かす為に、レストランだけでなく、イベント会場としても活用しているということです。

次回の東北支部行事での再会を祈念して、盛況のうち閉会となりました。

□北陸支部

支部長　棒田邦夫（金沢学院大学）

今号は、特にありません

□関東支部

支部長　内田和彦（岡村製作所）

平成26年度より支部新体制が発足して２年目に突入し、初年度の反省を活かし、支部活動の活性化を推進していきたいとの思いで先日関東支部会員に対し「支部活動に対するアンケート」を実施いたしました。残念ながら回収率は10％程度です。アンケート結果は支部ニュースにて関東支部会員の皆様にフィードバックし活動の活性化につなげていきたいと思います。

① 関東支部交流会開催報告

平成27年２月14日に会員相互の交流と事業推進を目的として支部交流会を開催しました。当初総会としての開催を予定しておりましたが、親しみやすい会となるよう交流会といたしました。東日本大震災のその後をテーマに講演会も行い、若井正一氏（東北支部前支部長）、鈴木敏彦氏（震災部会長）、山田智稔氏（元震災部会長）、飯村和道氏（I.I.I.）の４氏にご登壇いただきました。交流会では支部新体制のご紹介と活動方針をご説明し、その後の懇親会にも多くの方々にご参加いただきました。

② 27年度関東支部見学会

平成27年12月19日に見学会を開催予定です。高齢期の豊かな暮らしを目指す室内計画をテーマに高齢者施設向けの家具製作現場（光リビング）にお邪魔し、配慮点などをお聞きしながら見学をした後、西田恭子氏（三井のリフォーム住生活研究所所長）をお招きしご講話いただく予定です。

③ 支部交流会

昨年度に引き続き交流会を開催する予定です。開催時期は27年度が終了した４月以降となる予定です。

□東海支部

支部長　河田克博（名古屋工業大学）

2015年７月４日（土）に、名古屋工業大学にて支部総会を開催しました。この折、永年支部活動に貢献された藤田淑子氏を支部名誉会員として表彰いたしました。氏は、支部創立時からの会員で、今後もますますお元気に支部

活動にご助言・ご支援されることを期待する次第です。

また、総会の後、支部創立25周年を記念して３月初旬に行ったアンコール遺跡群旅行（参加者12名）の報告会を開催しました。聴衆は28名、映像を見せながらの報告会で、旅行に参加していない人にも印象の残る、好評裡に開催できた報告会でした。

一方10月30日（金）に、当支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会のリレーセミナーで、インテリアデザイナー協会会長も務められている喜多俊之氏による講演会を開催しました。演題は「世界のミュージアムで選定された喜多俊之作品」で、氏によれば初めて話す内容といわれる、作品が生まれる背景や源泉を語っていただいた貴重な講演会となりました。参加者は60名以上、将来の確固としたデザイナーを目指す人々にとっても大変有意義な内容でした。

藤田淑子氏受賞式

アンコール遺跡群等旅行報告会

□関西支部

支部長　片山勢津子（京都女子大学）

９月26日（土）－27日（日）、飛騨高山への研修旅行を実施いたしました。宿泊を伴う見学は本支部では初めてのことですが、数年前から温めてきた特別企画「飛騨高山の家具工場とフィン・ユール邸復元施設見学」です。当初は参加希望者が予想外に少なく心配されましたが、結果的には関西インテリアプランナー協会やインテリア設計士協会からのメンバー参加も含めた総勢17名で、情報交換の場としても有意義な会になりました。

初日は日進木工（株）を訪れ、通常見ることは難しい木工家具製作の現場と文化財の復元作業を見学することができました。その後、飛騨・世界生活文化センターにて匠展を見学し、飛騨家具の歴史と新しい取り組みなどを知りました。宿泊はホテルアソシア高山リゾートです。素晴らしいインテリア空間に加え、北アルプスのパノラマが広がる展望温泉に癒されました。そして、懇親会後の二次会では、今後の支部の活動について、関連する他会との連携を深める必要性について話し合いが行われ、親睦に加えて意義深い時間を持ちました。

二日目はキタニ木工（株）で、ショールームと復元されたフィン・ユール自邸を視察しました。北欧名作家具のライセンス生産については、復刻だけではなく、飛騨高山で培われたモノづくりの精神が生かされているとの説明を受けました。フィン・ユール自邸はアート・ミューシジアム・クラブの支持を得て図面に忠実に復元されたものです。その空間体験からは、スケール、材質、色彩などフィン・ユール氏の繊細な思いを感じ取ることかができ、多くの貴重な教示を受けました。

その後は現地解散となりましたが、高山の伝統的建造物群保存地区を見学する人、白川郷へ向かう人など、各々思い思いの旅を過ごしました。

日進木工集合写真

□中国・四国支部

支部長　平田圭子（広島工業大学）

１．支部総会

■日時：平成27年６月６日（土）14:30～15:30

■場所：広島工業大学新３号館219号室

今年も総会講演会、定期講演会、見学会、ミニレクチャーなど面白い企画が予定されています。今年度はいよいよ学生ネットワークも始動します。

２．総会講演会（支部会員による講師）

■題目：「ユニバーサルデザインの広がりと教育実践」

■講師：松尾兆郎 氏（穴吹デザイン専門学校）

■日時：平成27年６月６日（土）16:00～17:30

■場所：広島工業大学 新３号館実験棟417号室

■参加人数：20名

１．ユニバーサルデザインの教育実践、２．ユニバーサルデザインの広がり、３．日本的ユニバーサルデザインの黎明期についてお話しくださいました。教育実践としてされた「電停のユニバーサルデザイン」のプロセスは具体的であり、興味深いものでした。

３．定期講演会

2015年７月６日、日本インテリア学会中国・四国支部と中国インテリアプランナー協会の共催により、広島工業大学広島校舎において、広島国際学院大学に客員研究員としてイタリアから来日されているマウロ アリギ（Mauro ARRIGHI）さんの講演会が実施されました。アリギさんはイタリアのボローニャ美術アカデミー（Academy of Fine Arts of Bologna）のデジタル・アート及び電子音楽科の講師を務めながら、現在イギリスのサウサンプトン・ソレント大学（Southampton Solent University）に在籍し博士号を取得中でいらっしゃいます。講演のテーマは“Creativity in the post-digital scenario and the influence of Post Humanism / TransHumanism in Art & Design”で、絵画や日本のアニメ、映画を事例にあげながら、「見る」ことの西洋と日本の違いや、SF小説・サイエンスフィクションに基づくプロダクトデザインとソーシャルメディアについて、さらに博士論文で使用するオリジナル映画のシナリオに至るまでアリギさんの幅広い研究内容が紹介されました。人間の内と外、シェルターである自身の部屋、現実と仮想世界などの内容は、日本インテリア学会中国・四国支部で進められている「都市のインテリア」に通じる大変興味深い講演となりました。

（講演会担当：伏見記）

４．ミニレクチャー＋見学会

■題目：『空き家再生』

■日時：平成27年８月27日（木）15：00～17：30

■内容：

１．ミニレクチャー　谷川大輔氏

（場所：広島県東広島市福富町竹仁地域センター）

２．空き家見学会（場所：広島県東広島市福富町）

■参加者：60名（正会員・準会員９名、学生45名、その他８名）

田園風景が拡がるのどかな場所にこの空き家は建つ。所有者である谷川氏は、築200年程の古民家を今年７月に購入。学生と共に少しずつ解体を続けている。

始めに、竹仁地域センターでミニレクチャーを開催。社会問題となっている空き家について、空き家入手に至るまでの経緯、解体のプロセスなどのレクチャーを受けた。その後、徒歩約15分の空き家までの散策は、学生参加が多数のためグループ分けをして、初対面の人とコミュニケーションしながらの移動となった。空き家の解体はかなり進んでおり、外観は変わっていないが、内部はほぼ構造体のみ。解体前には隠れていた土間、火鉢、堀こたつ、屋根裏等があらわしになり、以前の生活空間に、様々な想像がめぐる。谷川氏の構想では、この建築

の新しい役割を、住宅ではなく人々の交流の場にしたいと言う。田んぼに囲まれた骨組みだけの建築は、のう（農）舞台を感じさせる魅力的な空間である。

今回、この企画と同時に学生ネットワーク（中国・四国エリアのインテリア系学生の自主的な活動を中国・四国支部が支援するプログラム）を立ち上げた。参加した学生は、「空き家」の作業に参加する機会も与えられることになる。真夏の夕刻、皆いい時間を過ごし、各々思いを胸に帰路についた。

（ミニレクチャー担当：細田記）

５．学生ネットワーク

中四国支部では11月20日、第１回インテリア系の学生ネットワーク会議を行った。参加大学は、広島工業大学、広島女学院大学、穴吹専門学校、安田女子大学、近畿大学工学部であった。中四国支部では、インテリア系の学生ネットワーク会議は初めてであったが、段々と打ち解けて、最終的には活発な意見交換がなされた。そもそも６月の総会時に、中国・四国支部長の平田先生から、「インテリア系の学生ネットワーク」を立ち上げて欲しいとの依頼を頂いたことから始まったのだが、当初は、どのようなことができるか心配だった。しかし、学生に聞いてみると「とても良い事だと思います！」という声が返ってきたので、前向きに進める事にした。近畿大学工学部のインテリアデザインコースの学生は、毎年10名程度と少数派であり、他大学との交流の機会もほとんどないのが現状である。このため我々も他大学との交流は是非行いたいとは思っていた。第１回の学生ネットワーク会議を経て、おそらく、各大学でも他大学との交流を求めているということが実感できた。今後は、さらに数多くの大学・専門学校に参加して頂き、「インテリア系の学生ネットワーク」を広げ、学生の自主的活動が活発化することを望んでいる。

（学生ネットワーク担当：谷川記）

□九州支部

支部長　森永智年（九州女子大学）

昨年、８月下旬にTOTO本社工場の一角にショールームとミュージアムがリニューアルオープンしました。北九州支部ではTOTOミュージアムの見学会を企画しました。

TOTOミュージアム・ショールーム見学会

見学会日時：12月19日（土）13：00～14：00
場　所：北九州市小倉北区中島２－１－１
集合場所：ミュージアム１階エントランスホール12：50
見学説明：TOTOミュージアムガイド

衛生設備器具で有名なTOTOの製品は、「近代産業遺産」で衛生陶器・食器遺産群、「建築設備技術遺産」で14製品、「機械遺産」で１製品が認定されていいます。TOTOというと、ウォシュレットとホテルニューオータニに東京オリンピック時に設置された世界初のユニットバスルームが有名ですが、そもそも操業当時の主力商品は硬質陶器・磁器製食器でした。当時、製作された東洋陶器製食器の垂涎の名品が収蔵されています。

TOTO創立100周年記念事業の一環として、開設されたミュージアムはこれらの製品が一堂に揃って展示されています。

近郊には、今年、世界近代産業遺産に登録された官営八幡鐵所、遠賀川水源地ポンプ室があり、ものづくり街として発展してきた北九州の明治・大正・昭和の産業の歴史をみることができます。また、近年は公害を克服した経験を生かし、環境再生産業が北九州エコタウンを中心に展開されています。

来年は、宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界遺産登録推薦され、29年夏のユネスコ世界遺産委員会で審査を受けることになっています。

■平成27年度研究部会だより

□歴史部会

部会長　河田克博（名古屋工大）

今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2015年10月25日（日）に金沢にて開催いたしました。見学建物は、海みらい図書館（シーラカンスＫ＆Ｈ設計）、鈴木大拙館（谷口吉生設計）、それと重要伝統的建造物群保存地区のひがし茶屋街にある懐華楼の３物件でした。前２建物では、現代建築の空間内部構成を楽しみ、懐華楼では、女将の馬場華幸さんの新鮮な話を聴く講演会を兼ねての見学会で、近代和風建築内部の文字通り華やかな空間を満喫しました。また昼食は、「石亭」にて加賀料理を楽しみ、目と耳と口を満足させる感動を残せました。参加者は39名で、一同に好評を得た充

実した見学会でした。

□計画・構法・デザイン部会

部会長　栗山正也（ＫＤアトリエ）

今号は、特にありません

□人間工学部会

部会長　白石光昭（千葉工業大学）

今年度は、株式会社天童木工さんのショールームをお借りして、８月と11月に２回連続で木製家具と人間工学関連の研究会を開催いたしました。

８月は30名､11月は24名の方々に参加いただきました。各研究会とも質疑が活発に行われ、木製家具に対する関心の高さを感じました。但し、人間工学は木製家具の開発時には、学問としてまだまだ貢献しているとは言いにくく、今後の研究対象として簡易的に座り心地を判断できる手法等の開発が必要であると感じました。

今後も定期的に研究会を開催していきたいと考えていますが、皆さんからのご要望があれば、ご連絡下さい。

□教育部会

部会長　河村容治（東京都市大学）

第22回卒業作品展の開催

2015年10月24日（土）12：30～16：30　金沢勤労者プラザ１階103研修室にて、大会本部との共同で第22回卒業作品展を開催した。全国の大学・短大・専門学校・高等学校　47校から選ばれた卒業制作の作品55点を展示した。同日、開かれた審査委員会で優秀作品を下記のとおり選出した。本年度の応募作品は、全般に質が高く、地域や環境の諸問題について新鮮な視点でとらえた作品が目立った。

最優秀作品賞に選ばれた金沢美術工芸大学「歴都再生」は、金沢の中心市街地の空洞化をテーマとし、有休空間の転用・用水の再現・芸術の育成という３つの提案からなり、現状をよく把握し緻密な作品に仕上がっていた。優秀作品の文化学園大学「キゴコチ　ー和装の美を世界に発信する空間の提案ー」は、伝統的な麻の葉をモチーフに細やかな光の演出を行ったインテリア作品で、爽やかな空間構成が際立っていた。また優秀作品の東京藝術大学大学院「家具を葺く」は、茅という屋根の素材を家具に用いた斬新なアイデアの優れた作品であった。

［審査委員会］

審査委員長：直井英雄（学会会長）

委　　員：大会実行委員　斎藤重美
（テクネアーモステクネ）

大会実行委員　新舛静香
（株式会社スパイラル）

教育部会長　河村容治

［受賞者一覧］

最優秀作品賞：

・金沢美術工芸大学　美術工芸研究科　修士課程　デザイン専攻 環境デザインコース
　堀場絵吏「歴都再生」

優秀作品賞：

・文化学園大学　造形学部　建築・インテリア学科　インテリアファブリックコース
　中島有紗「キゴコチ　-和装の美を世界に発信する空間の提案-」

・東京藝術大学大学院　美術研究科　デザイン専攻　空間・設計研究室
　望月和也「家具を葺く」

奨励賞：

・千葉県立市川工業高等学校 インテリア科
　伊藤夏稀はじめ５名「MBU14（Miracle Box Unit 1～Unit14)」

・静岡県立科学技術高等学校 インテリア科
　松浦真子「bibide-Bali-de-boo」

□研究協議会

議長　栗山正也（ＫＤアトリエ）

今号は、特にありません

□東日本大震災課題検討部会

部会長　鈴木敏彦（工学院大学）

今号は、特にありません

□現代インテリア研究会

部会長　長山洋子（文化学園大学）

「高齢者住まい法」の改正などにより、介護・医療と連携して高齢者を支援するサービスを提供する住宅「サービス付き高齢者向け住宅（サ高住)」が注目されている。そこで現代インテリア研究会では「インテリアの観点からのサ高住視察」を実施した。

月日は2015年９月19日（土)、東京建物シニアライフサポートの事業による「グレイプスガーデン西新井大師」および「グレイプス浅草」の２か所である。参加者は、川島、江川、長山。

「グレイプスガーデン西新井大師」は平成26年に新築オープンし、いつまでも住み続けられる庭園邸宅として

敷地内庭園・屋上庭園を備え、園芸療法などのアクティビティを実施し、テラスに接続したダイニング兼リビングの多目的室は、日差しが射しこむ明るい空間として居心地の良さをアピールしている。

「グレイプス浅草」は東武線浅草駅に近接し、下町の都会に位置する立地の良さが際立っている建物で、コンセプトには「自立して生きたいシニアを応援する賃貸住宅」としている。HP上での住まいアンケートなどを通して、日常感じていることなどの声を反映させてグレイプス浅草が生まれたとある。

この２つの集合住宅は、どちらも24時間サポートにより、より自由な暮らしを提供するというサ高住のコンセプトのもとに運営されているが、居住者の意識や暮らし方は異なるものであった。サ高住が介護支援を受けながらも、高齢者の一律ではない様々な要望を受け止めつつ、自立した暮らし方を提供する集合住宅として期待できるのではないか。その事例として興味深い視察であった。

サ高住視察について参加者の江川香奈氏のレポートを掲載し、現代インテリア研究会の活動報告とする。

◆視察レポート　江川香奈

グレイプスガーデン西新井大師とグレイプス浅草
福祉施設としてあり方の視点から

◇グレイプスガーデン西新井大師

・周辺に商店街や西新井大師があるため、外へ出かけやすい環境である。
・エントランスは明るく、高齢者の訪問者を暖かく迎える造りであるとともに、出入口正面のカウンターから出入をきちんと把握できる。
・１階に明るく手入れの行き届いた季節感のある庭と、それに面した食堂があり、四季を毎日感じられる造りとなっている。
・食堂ではデイサービスセンターのような活動が一日に２回行われており、施設の中心的な部屋となっている。
・食堂の座席配置は４人席が中心であり、高齢者同士がコミュニケーションをとりつつ食事をとることを促していた。
・６階の屋上庭園ではレイズドベッドがテーブル形状になって椅子が備えられているため、車いす利用の有無に関わらず、気軽に植物にふれることができる工夫がされている。
・浴室は手摺などが整備されており、高齢者が利用しやすい設備となっていた。
・トイレと寝室に呼出しボタンが設置されているため、緊急時の対策に重点が置かれている。
・ミニキッチンや冷蔵庫のスペースが確保されているが、収納や家具を置くスペースに、もう少しゆとりがあるとより充実した生活を送ることができると期待される。

◇グレイプス浅草

・浅草寺など、賑わいのある街中にあるため外へ出かけやすい環境であるような恵まれた立地であり、地下１階に駐輪場も備えてあるため、元気で健康な生活が送れる建物として整備されている。
・１階にデイサービスセンター、２階にクリニックが併設されていることから、生活のアクティビティだけでなく医療面でも安心感がある。また１階のデイサービスセンターは外部に面して大きい開口部が取られているため、外からもその様子を把握でき、地域とのつながりを自然と密にしている効果が期待される。
・住戸数が多く、一般の集合住宅のように外部廊下を介して住戸が配置されており、廊下から住戸の様子は伺えない。水流センサーなどにより中で生活されているかどうかは把握できているとのことだが、建築的に工夫することによってある程度住戸内の生活感が外廊下から伺えるようにすることで、住民同士のコミュニケーションの促進につながると考えらえる。
・屋上庭園が整備されており、スカイツリーや浅草寺などを眺められ、気分転換の場としても有効である。
・食事や趣味活動を行う食堂が地下１階のため、開口部がなく圧迫感が多少ある。都心で限られた敷地条件ではあるが、コミュニケーションの中心となる食堂は季節や外の様子が分かる開口部を設置することが望まれる。
・食堂の座席は２人席が中心であり、職員の話では１人で食べる人が多いとのことであった。
・住戸は約31～50㎡と１～２人で生活することを想定すると収納も含め、十分な広さが確保されている。
・洗面、キッチン下部は収納としても使用できる。車いす使用者用にパネルを除け足が入る構造にすることも可能であり、双方の利用の仕方を考慮した工夫がされている。
・トイレと寝室に呼出しボタンが設置されているため緊急時の対策に重点が置かれている。

２つの施設について

立地や居住者の様相によって同じサービス付き高齢者住宅でも望まれる施設の整備方法は異なることが把握できた。それぞれの施設にあった、スタッフが見守りやすく、居住者が楽しく健康に過ごすことができる施設整備の工夫が随所に見られ、大変参考になった。

■グレイプスガーデン西新井大師

庭園：敷地内の庭園に100種類以上の木や花を配している。介護・認知症の予防や心身の健康維持を目的に「日比谷花壇」が研究機関と開発した高齢者のための「フラワーアクティビティプログラム」を導入。

ダイニング：食事やコミュニケーションのスペース
１階庭園に面していて明るい雰囲気を
醸し出している。

単身居室：緊急呼び出しボタンが備えられている個室。19.30㎡あるが、狭さ感が否めない。

■グレイプス浅草

２人用住戸：リビング、ダイニング、キッチン、ベッドルームを備えた1LDK住戸、約40㎡。

地下階に設置されたダイニングルーム

浅草周辺を見渡せる屋上庭園
夏にはここで家族も招いて花火大会見物が行われる

□インテリア環境研究部会

加藤力（京都大学非常勤講師）

今号は、特にありません

□日本インテリア近代史研究Ｇ

湯本長伯（日本大学／神戸大学）

平成27年度の活動として、剣持デザイン研究所の松本哲夫先生にインタビューさせて戴いた。

■日時：2016年１月18日（月）15〜19時
■場所：九州大学有楽町オフィス
■講師：松本哲夫氏（剣持デザイン研究所）
■聴手：日本大学工学部建築学科・湯本長伯研究室
（岩井友哉、横川結愛奈）

テープ起こし等は既に済んでいるので、取りまとめ次第、会誌上で報告をさせて戴きます。

■事務局より

白石光昭（千葉工業大学）

総務委員会の欄をご覧ください。

■連載『インテリアの行方』
ー出雲大社庁の舎の解体ー

谷川大輔（近畿大学）

出雲大社の庁の舎が解体されるという。私にとって大変ショッキングな話題が飛び込んできた。

私は数年前、菊竹清訓氏が亡くなられる直前に、日本建設業連合会の会報誌『Ace』の中の「BCS賞受賞作品探訪記」の執筆のため、出雲大社庁の舎を訪れた。それまでも何回か、出雲大社や庁の舎を訪れたことはあったが、その時は式年造替ため本殿は吹き替え工事を行っており、外観すら見ることはできなかったが、庁の舎は神社の木造建築群のなかでコンクリート建築として見事に調和し、感動的なまでに造形的であり、「これが建築だ！」と心の底から思ったことを覚えている。というのも、この時初めて建築家菊竹清訓氏に直接お話を伺うことができた。憧れの建築家に「か・かた・かたち」論や「メタボリスム＝とりかえ理論」から出雲大社庁の舎の話をしてみると、菊竹さんは本当に楽しそうに３時間以上話をしてくれた。東京から何時間もかけて出雲に行き、プレゼンをしてはこれではダメだと、何度も、何度も考え直したという。その話は凄まじく、建築家としての苦悩、戦いの結晶が庁の舎なのだと心からそう思えた。この時、菊竹さんは次のように話してくれた。

「庁の舎の設計を始める以前から、なぜ出雲大社のような荘厳で高さをもつ建築が、京都や奈良ではなく出雲にあるのかということに興味をもって調べていました。当時は建築とは一体何だろう、建築家は何をすればいいのだろうかと建築の「方法」を模索していました。その「方法」がのちに武谷三男氏が獄中で書かれた「三段階論」に影響されて「か・かた・かたち」論に発展していきますが、当時はまだ整理段階でした。出雲大社の社殿を拝見したとき、「とりかえ理論」の重要性を感じ、劣化したときに交換できるように工場生産の部材であるPCコンクリートにチャレンジしました。これは1960年に提唱したメタボリズム（新陳代謝の考え方）を具現化する結果となりました。「メタボリズム＝とりかえ理論」は、取り替えること以上に、なぜここが傷むのかということを考えることが必要だと思います。また庁の舎のPCコンクリートのように高い技術力を持つ職人さんが魂を込めてつくる「高い精神性」を伝えていくことが重要だと思いました。」と。出雲大社庁の舎が建築家菊竹清訓にとってとても重要な建築であったことがよくわかる。

現在の出雲大社庁の舎は1953（昭和28）年５月に焼失してしまった木造の庁の舎を復興し1963年５月10日に竣工したものである。このため防火、耐震及び耐食性に優れた鉄筋コンクリート構造が採用され、プレストレスト（以下ＰＳ）及びプレキャスト（以下ＰＣ）コンクリート工法、ＨＰシェル工法など当時の最先端の技術で施工されている。木造の神域に鉄筋コンクリートの建物を建てることは竣工当時としては斬新なものであったが、時間の経過によって深みと落ち着きが感じられ木造群と見事に調和している。

この建物の大きな特徴は二つある。その一つは、中に階段室をもつ周囲16mの巨大な二本の柱とその柱をつなぐ47mスパンの二本のＩ型ＰＳ梁（梁成1.8m、幅0.4m）である。この二本のＩ型梁には、ポストテンション式・ＰＳコンクリートによるフレシネー工法という当時の最先端の技術が使われている。ピン接合であるというこの梁と柱には、かつての出雲大社本殿の高さに対する「技術」が水平方向に置き換えて表現されているのである。

この建築のもう一つの大きな特色は、ＰＣコンクリートによる量産部材を多用していることである。ＰＳコンクリートの柱と梁以外はＰＣコンクリートによって造られている。各部分に分けて東京の工場で生産されたものを現場で組み立てている。このことで取り替え可能な建築を実現している。特に側壁は、出雲大社が農耕の神であることを象徴して、出雲地方の「稲架」をイメージし

たデザインになっている。この緻密なデザインは、ＰＣコンクリートだからこそ可能なものである。さらにこの側壁の横桟にはガラスがはめ込まれており、繊細な光を内部に導くと同時に、夜はこの建物全体が神前を照らす「あかり」となる。

このように出雲大社庁の舎には、出雲の技術と文化が濃密に表現されているのである。それだけではない、建築家の魂が込められているのである。現代の建築でこのような建築は、なかなかみることができない。あの場所に保存することはできなくても、どこかに移築できないか。場所を変えて、式年造替ができないだろうか。建築はモノであるが、モノを介して人の気持ちは伝わっていく。出雲大社や伊勢神宮がそれを示してくれている。われわれも新陳代謝を重ねて建築を受け継いでいくことで、建築家の情熱を、人間の思いを後世に伝えていくべきだと心の底から思っている。

■各地各氏から

□インテリアデザイン史料を移管して
ー（第３稿）ー

舘　野　羊　一
日本インテリア学会　関西支部　会員
関西インテリアプランナー協会　会員

第５話　ー設計部當用日記からーその２

當用日記の昭和13年までの１冊、１冊を詳しく調べていない。今後に研究が出来れば嬉しい。ここでは昭和４年・1929年を（前年に昭和天皇が即位された。この４年は世界恐慌の年）、一時代の切り口として、インテリア史の微細な部分ではあるが、日記の６月までに毎日設計業務として記載された物件名を一例として、列挙してみる。大阪設計部の記録である。

公共建築の内装では、三重県庁内務部長官家具・兵庫県庁知事舎・茨城県庁・徳島県庁・神戸商工会議所緞帳・福岡県庁家具、窓掛・大連、大和ホテル・朝鮮博覧会家具・第４師団司令部窓掛・大阪市電、奉祝花電車装飾・伏見警察署、曾根崎警察署の家具・日本銀行敷物・六甲ホテル、奈良ホテル緞帳・大阪松竹歌劇団モケット図案・甲子園テニス倶楽部・満州鉄道社員組合住宅・浪速高校、天王寺中学、上宮中学、小阪小学校賓室などの装飾・家具・緞帳などがある。

船舶では前述の龍田丸と長崎造船S.No452・うらる丸・三井物産造船所S.No159の船が長く記載されている。これ以外に創作家具装飾陳列会を大正９年から大阪店で開催していたことも有り、この年の日記帳でも、個人邸宅の家具・装飾の物件は30件を上まわる。どのような方様か分からないが一部お許しを頂き物件名として紹介する。稲畑邸、山口邸、棚橋邸、六鹿邸、島津邸、森下邸など多くの御名を見ることが出来る。全くその内容は残念ながら分からないし、資料は無い。

この年にみる設計物件名と同じように公共建築・邸宅・船舶などの物件名の変化はあるが、昭和13年まで多くの物件の記載がある。

記載から、設計作業内容は想像が出来る。今日のように、インテリア構成材に既製品が無い時代である。このインテリアデザインの黎明期は、全て別注構成品である。

日記を見ると、『敷物図案作成』・『ロートアイアン原寸図』・『玄関照明器具原寸』・『腐蝕硝子図案』・『家具原寸図』・『造作装飾詳細』・『暖炉囲い金物原寸図』など、達筆の万年筆で書かれているので読みにくいが、設計部７名の活躍が読み取れる。何年か忘れたが、半分以上の部員が欠勤している。スペイン風邪が猛威を振るったらしい。昭和８年の日記には、１月10日に大阪髙島屋全職員で恒例の中座貸切り観劇会が有ったことも記載されている。正月大入り袋が配られ、店員は50銭なのに装飾部は２円入りであったと書かれている。暮らしが分かり、ライフスタイルの一部が分かる。

インテリアデザインは、人々のライフスタイルをリードしなければならない。その時代がどうであったかを知ることは、参考になる。

第６話　ー創作家具展の歴史についてーその１

百貨店の売場から無くなったものに家庭電化製品・カメラなどがある。家具は寂しい商品群ではあるが、まだ展示されている。

布団で畳に寝て、卓袱（ちゃぶ）台で食事し、座卓で書き物をしてきた生活を、洋家具を提案して暮らしの洋風化提案を百貨店が始めた。家具は本来、別注設計の部屋に、椅子などのお好み名品を除き、別注設計されるべきものである。

1920年・大正９年に家具売り場の展開とは別に、日本で初めてと言い切るが、『第１回　家具陳列会』を大阪店・催し場で提案した。翌年は『生活改造家具陳列会』を提案した。これ以後、家具売り場は洋家具・和家具を品揃え良く展示して、家具を通じてインテリアの近代化を進めた。昭和８年には東京でも『創作洋家具』展を開催した。

創作家具展は以後、大阪・東京で10回展開され、昭和19年・1944年、戦争激しい時にも展示された。

戦後、復興の兆しが見え始めた昭和24年・1949年、春と秋の２回、『髙匠会』と名付けられ、創作家具展を復活した。このあと24年間開催された『ラ・シャンブル・シャルマント』展に引き継がれる。

その２　シャンブル・シャルマント展

昭和31年・1956年から、髙島屋設計部員の社内コンペで創作家具デザインを競い、毎年これからのあるべきライフスタイルを、家具を通じて提案した。これを『ラ・シャンブル・シャルマント』展という。日頃、デザイナー名は表示しないが、このコンペでは、ひと部屋の家具群をデザインし、社内審査に当選すると工場に向かい製作し、完成した家具セット会場展示に、設計者名も出る。売れた赤札が２枚も付こうものなら、喜んだものである。後半、量産家具や、インテリアに組み込む標準家具も開発された。家具デザインの透視図と、製作図が一部髙島屋史料館にある。

このように家具デザインをリードしたが、コクヨ・イトーキなど、量産家具メーカーの台頭や、輸入家具、廉価家具メーカーの時代になり、昭和55年まで毎年開催されたが、一時代を演出した初期の『創作家具展』と、『ラ・シャンブル・シャルマント・魅力ある部屋の意味』展は幕を閉じた。

その３　海外インテリアの紹介展

髙島屋は海外のインテリアデザインの紹介を早くから展開している。

昭和16年には、第１回『シャロット・ペリアン』展・『選択・伝統・創造展』を開き、欧州のインテリアデザインを紹介している。この時髙島屋の招待でのペリアンの来日は、ナチスドイツによるパリ陥落の時で、マルセイユをぎりぎり白山丸で出航している。

昭和26年には、吉田五十八創案による『新日本感覚の建築・美術・工芸』展を開催した。このあとの、昭和28年に再度来日したペリアンは国際デザインコミッティー（丹下健三・柳宗理・亀倉雄策・岡本太郎ら）の創設に参加し、坂倉準三・前川國夫と共に顧問として関与している。

昭和30年の『ル・コルビュジェ、レジエ、ペリアン』展・『芸術の綜合への提案・巴里1955年』展を開催し、現代デザインを建築・家具を通じて紹介した。この時の出展家具23点について髙島屋とペリアンは製作販売契約をし、うち10点を日本国内限定家具としている。この時のペリアンによる両面飾り棚（約3900幅X2000高）が、今も髙島屋史料館の玄関ホールに置いてある。いまだにびくともせず、髙島屋の家具製作力を見ることが出来る。

おわりに

明治11年に装飾係りが発足し、大正２年・1913年に図案部（設計部）が出来た。135年もの間、インテリアデザインを提案し、それを実現して来た。今回、多くのインテリア物件が移管史料で読み取れた。

この135年は日本の激動の時代である。建物も、船舶も大いに栄え、そして戦争で灰燼に消えた。長い時を経て多くの建築を担当し学び、また客船内装で、英国設計社などからインテリアデザインを学んできた。

豪華客船と言われるが、そのころのインテリア環境の一例を最後に述べておきたい。

明治元年の過酷なハワイへの移民元年者153名からはじまり、北米へ41万人、中南米へ24万人、豪州・東南アジアへ９万人など、昭和21年までに約100万人の日本人が、笠戸丸や、あるぜんちな丸などの客船に乗って移民している。人は『今より、より高みが見えた時、移動する』。

このような時代の大阪商船のぶらじる丸・あるぜんちな丸は、豪華なインテリアである。どのようなインテリアかについては、前述の画集２冊などで見られる。ただ一つ申し上げると後述のような長旅であるので、『遊歩甲板・プロムナードデッキ』が大切な余裕空間として設計されるべきだそうだ。

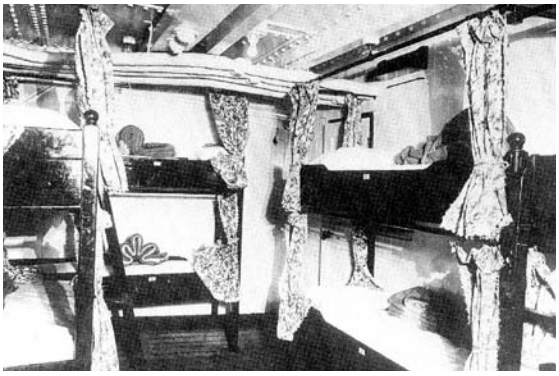
移民の方はいくら支払って日本を後にしたのか。昭和10年ブラジル・アルゼンチンまで、３等船賃225円・今の約100万円ぐらいだが（昭和11年・髙島屋大卒初任給45円の５倍から換算）、豪華な洋食ではなく、和食付き・２段ベットの４～８人部屋である。一例として、横浜を１月15日に出航し羅府間沖を通過し、パナマ運河通過、２月28日リオデジャネイロ到着、ブエノスアイレスに３月７日到着の51日間の長旅である。客船は格付けが厳しい。１等船室は3.5倍の約350万円となり高級ホテルに50泊するインテリアデザインの生活となる。現在は、ルフトハンザ航空なら、羽田を発ち、フランクフルト空港で乗り換えリオデジャネイロ着へ片道約30時間・エコノミー18万５千円で行ける。歴史的インテリア環境の一例である。

これまで多くの建築・船舶の内装や、お召列車、新幹線の客車の装飾などの、車輛のインテリアも受注している。このように、髙島屋装飾部・設計部は、その時代時代に、お客様のお求めになっているインテリア創作にお答えして来た。

インテリア史料の移管をお手伝いさせていただいたことから、いろいろと学ぶ事が出来た。これはごく一部の速報版である。

インテリアデザインは様々な人々の生活の空間が対象であるが、全てそこでの『人の為』に考えた、その上での実現の技術である。

●会報54号から３回に亘り掲載されました髙島屋インテリア部門の歴史記も本会報で終わります。インテリアプランナーから申し上げれば、建築家と仲良く、良い空間を創造したいものです。



上の写真・浅間丸・３等客室・昭和４年

上は　50泊する、あるぜんちな丸２世・３等客室
昭和33年

日本郵船・橿原丸　特別室寝室（鈴木三一・画）
髙島屋史料館・収蔵原画　昭和14年ころ

★この作文の記述に関して、出典および参考史料を下記する。

１．髙島屋史料館への移管インテリア史料群
２．髙島屋150年史
３．髙島屋営業カタログ・昭和40年頃版から平成10年版まで。
４．髙島屋・家具・インテリア百年の歩み展・年表・昭和53年出版
５．鹿島出版会・2011年『シャルロット・ペリアンと日本』
６．建築画報社・2009年『鹿鳴館の建築家ジョサイヤ・コンドル展』図録
７．アテネ書房・昭和61年・三菱重工業（株）船舶技術部編
『豪華客船インテリア画集』
８．拝見した資料・三菱重工業・横浜製作所・2014年『三菱横浜　船のインテリア画集』
９．日本郵船歴史博物館　提供　新人物往来社『復刻版明治大正　時刻表』
10．日本郵船歴史博物館　発行　2011年『洋上のインテリア』展　図録
11．インターネット・　ウィキペディア・フリー百科事典
12．樋口　治作品集編集委員会　『デザインの年輪』
13．世界の艦船・別冊『日本の客船』1868－1945・野間　恒/山田廸生　共編

■会報55号記事・後日談報告

桑原道雄

小生、名古屋に近い愛知県からこちらに来て、10年余りになります。新横浜の駅近くにカリモクのショールームがありますが、ここで家具の設計をしていました。時々ショールームに行くのですが、たった一点だけ小生が設計したものが展示してあります。昔、青海線の羽村に住んでいたことがあるのですが、いまこの町にカリモクの多摩営業所があり、びっくりしています。

学会の関東支部ニュースでご存知だと思いますが、去る２月14日（土）に新宿の旭化成ホームスで支部の新体制発足にむけて、若井先生の講演会、支部の交流会と懇親会があった。当日はバレンタインで実は小生の誕生日でした。それで宴会に入る前に、会報55号に寄稿したこと、本日は誕生日だということをＰＲして、カンパイの音頭をとりました。翌日の日曜日には宅急便が届き、あけてみたら、すてきなショコラでした。ホワイトデーには忘れることなくお返しをしました。

■『日本の近代建築史と、室内装飾のあゆみ展のご報告。』

関西支部・舘野羊一

近代建築史と、インテリア史の展覧会が、偶然、10月から、年末まで、神戸と大阪で、開催されました。

●１．髙島屋史料館『美術とインテリアの出会い―髙島屋・装飾事業のあゆみ』展・大阪日本橋・10月１日

から12月25日まで。

①デザイン懇談会・11月17日・日本インテリア学会関西支部・後援

●２．新神戸・竹中大工道具館『近代建築・ものづくりの挑戦』展

10月31日から12月27日まで。

あわせて２件の講演会の開催。

①『ものづくりの近代建築史』

内田祥哉・藤森照信（東大名誉教授）

②『建設会社・設計部がきずいた世界』

石田潤一郎（京都工芸繊維大）

★１．室内装飾あゆみ展は、大阪・髙島屋史料館で好評裏に開催された『美術とインテリアの出会い―髙島屋装飾事業のあゆみ』展です。元、髙島屋建装事業部勤務の私から申し上げれば嬉しかった記事ですが、４大新聞社が『百貨店の活躍の分野の広さを知った。』と書いたコラム記載が有りました。明治11年から始まった髙島屋のインテリア事業の歴史展です。敷物、緞通の企画・製作に始まり、窓飾り、装飾織物を受注。やがて造作工事・創作家具製作を手掛けます。分野は客船の内装と御料車の内装（明治32年に始まった）、そしてその後、多くの県庁建築の室内装飾と、ホテルの内装を受注します。各新聞で特に取り上げられたのは、劇場の緞帳の調製・原画作家依頼から製造・監理、まで全てと、豪華客船やホテル・列車の内装の設計施工を行っていること。これらは百貨店が密接に取引のある世界が広いことから可能であると記述されました。また、昭和49年には、迎賓館赤坂離宮の改装を他の百貨店と共に担当。様式家具の研究・調達をしましたが、これらが今回、展示されていました。

また、昭和４年頃のインテリアデザイン国際コンペが、秩父丸・氷川丸の高級客室を対象に行われ、三菱重工・横浜製作所で保管されている当時のパース百数十枚から、採用された髙島屋のデザインの２枚が展示されました。また、洋家具の創作展示販売展では、『シャンブル・シャルマント展』を展示、家具創作史への挑戦が見られました。これらの流れは現在も維持、発展され髙島屋スペースクリエイツ（株）に引き継がれています。

★２．竹中大工道具館での開催『近代建築ものづくりの挑戦』展

第１部．建築の文明開化―棟梁とお雇い外国人の活躍―

西洋建築の導入により、普請の有り方が大きく変わり、進取の精神をもった棟梁の挑戦の史料を展示。

第２部．歴史主義との格闘―建築家と請負業の登場

西洋建築を日本人で造ろうと、教育機関の充実と、大規模な建築を実現する技術と、素材の生産が始まる。

第３部．鉄とコンクリート―技術革新が建築を変える。

…これらのテーマで、歴史的史料が展示され、改めて建築の流れと、人々の挑戦を学びました。また、２回の講演会は、満員の盛況でした。（竹中大工道具館ホームページ参照）

★期せずして、２つの展覧会「建築とインテリアの歴史展」を学ぶ事が出来ました。

髙島屋装飾事業あゆみ展・大阪・日本橋

竹中大工道具館・近代建築・ものづくりの挑戦・神戸・新神戸駅前

■ 編集後記

湯本長伯（日本大学・神戸大学）

今号は、丁度様々な学内外の公的行事や対外的な（主に設計の）仕事、そして私事（定年退職）に重なってしまい、大幅な遅れを生じてしまった。何時もながらではあるが、お詫び申し上げる次第である。と言っても、原稿の早い方は何時も早く、原稿の遅い方は何時も遅い。目次を作るのは編集委員会だとしても、原稿依頼～催促～印刷所との事務的やり取り等は、何とか事務局にお願いしたいと思う。と言っても、何から何まで無い物尽くしであり、発行予算も限られていることは百も承知している。

今回から広島の谷川先生に加わって戴いた。もしかすると、編集委員から抜けた平田先生が、代わりに若い元気の良い方を、というお心遣いかも知れないが、書いて戴いた『インテリアの行方』に、『出雲大社庁の舎』のことを書いて戴いたのには、少々驚いた。昨年の３月、日本建築学会において、同じ菊竹清訓設計である「旧都城市民会館　保存・再生・活用研究シンポジウム」を、私たちの『情報設計小委員会』の拡大委員会として、開催したばかりだったからである。そしてまた再び、近代の貴重な建築文化遺産が消されて行く。この２つの建築は、世界をも驚かせたものであり、また日本発で初の『建築理論』である『メタボリズム論』の実践と云うか、これを創ることで理論も形になったという、貴重極まりない文化遺産である。

研究会席上、建築文化遺産の保存再生活用の『連戦連敗』問題も採り上げたが、また連敗を積み上げたことになる。日本大学で「建築文化・社会構造設計　研究室」を主宰する私としては、まだまだ我が国で「建築は文化」であり、「社会構造の基軸基盤」という当たり前のことが、全く相手にされていないことを痛感する。況んやインテリアにおいてをやである。

なお、『庁の舎』については、早大古谷誠章研究室の若い学生が、何とかしたいと頑張っている。関心のある方は、連絡をお願いします。（早大代表：03-3203-4141）

その『インテリア』とは何かという問いも、十分には解明出来ずに終わってしまった。直井先生が巻頭言で触れられた、明治期に急激に床座から椅子座へと、明治政府に学校建築を通じて強制的に変えられたという『日本インテリアの独自性』のルーツについては、まさに『日本インテリア近現代史』WGのテーマでもあり面白い内容であったが、私が担当する最後の会報の56号に間に合わなかった。これは今後、他の学会も含め別の形で追及しつつ発表して行く予定で、もしそのような活動に出会うことがあれば、是非ご意見やご議論を戴きたいものと考えている。なお、高島屋百貨店の資料について、舘野さんの連載が終了した。しかし、貴重な資料はまだ沢山ありそうであるし、百貨店業界も様変わりして三井の三越カードも使えなくなった。日本インテリアの近代を担ったプレイヤーとしての重要性は言うまでもない。WGの活動に呼応して、私の研究室でも多くの資料を渉猟した。少し時間を掛けてまとめたいものである。

以上を含め今後とも、宜しくお願い申し上げます。（それにしても、最終締切への皆さんの反応は、素早かった！感嘆）

谷川大輔（近畿大学）

はじめまして、近畿大学工学部の谷川大輔と申します。昨年末に広報委員のご指名を頂いたため、この号で私は全く編集作業をしておらず、編集後記に掲載されるのが大変申し訳なく思っております。数年前、東京理科大学工学部第二部建築学科で助教をさせて頂いていたおりに、会長の直井先生のご紹介で入会させて頂きましたが、やっと広島に来てから活動するチャンスを頂けるようになりました。

近畿大学工学部建築学科は、建築学科の中にインテリアコースがあり、建築を学びながらインテリアを学んでいます。ですので、私も主に建築史を担当しておりますが、同時にインテリアの授業も担当するハイブリッド教員です。このようなスタンスでインテリア学会の皆様とお話ができればと思っております。来年度以降編集は担当いたします。まずは、大会や総会等でご挨拶させて頂きたく思っております。よろしくお願いいたします。

■日本インテリア学会会報第56号（2016.2.29発行）
編集者：谷川大輔、湯本長伯（レイアウト：廣瀬恭子）
発行者：直井英雄（日本インテリア学会長）
広報委員会：湯本長伯、谷川大輔、松田奈緒子、
丸茂みゆき、若井正一

■事務局
日本インテリア学会　事務局　押切泰子
〒275-0016　千葉県習志野市津田沼2-17-1
千葉工業大学　上野研究室気付
電話：080-2386-5652　FAX：047-478-0552
e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp